

樹林獄

プロローグ・禿鷹の眼

ブラジル中部、アマゾン河の中流に位置するマナウスは大都会だ。公式発表では人口約八十万ということになっているが、統計の網を逃れてスラムへ流入してくる人間たちを思えば百万近くに達するのではないかとみられている。

加えて、アマゾン目当ての観光客が年間数十万人は下らない。アマゾン河を下るにも上るにもここマナウスは中間点なので地の利がある。河を道としてジャングル奥深くへ探険に出かける中継基地としても都合がよかった。

実際、マナウスには他の国の大都会にあるものならほとんどのものが揃っていた。物ばかりでなく人間だって種々雑多だ。中南米ならどこだってそうだが、白人、黒人、東洋人、インディオ、何でもござれの人種の見本市。そしてそれらの混血。一目にはいったいどういう遺伝子の組合せなのか、首を捻りたくなる髪の色、目の色、肌の色の男、女、子供が往来を歩いている。

往来には決まって魚の匂いがたちこめ、威勢のいい市場の売手の怒声が飛びかい、土産を物色する観光客、そ

の観光客に群がる物売りの子供たち、銃を肩に担いだ軍人、春を売りたいげなオウムのように着飾った娘たち、金の採掘に一攫千金を夢見る山師たちなんかが雑踏を作って流れているのだ。

ポルトガル語や、スペイン語や、インディオ語が飛びかい、罵声や愛の囁きや、商談や政治を語っている。活気があり、奔放で、アマゾンの濁流の如き生命力に満ちあふれた人間たちがエネルギーを発散していた。

奴隷商人は感謝しなければならない。

彼にとってマナウスのそういったすべてが自分の商売を隠匿するカモフラージュになってくれているのだったし、いつでも新鮮で好都合な獲物を彼の前に提供しつづけてくれる。漁師にとってのアマゾン河が恵みの大河であるように、マナウスは奴隷商人にとって肥沃な都会なのだった。

奴隷商人——彼は浅黒い肌を持った生粋のブラジル人で濃い眉と鼻の下には立派な髭をたくわえていたが、まだ年齢は三十を少し出たばかりの、この世界ではようやく中堅に入ったところである。しかし彼には鋭い秃鷹の眼とピューマの知恵が備わっており、成績は群を抜いているといって良かった。未だかつて失敗した経験がない、というのが彼の誇りであり、他の評価でもあった。獲物——ほとんどが女であったが——を見つけると、どこまでも執念深く追っていき、必ず捕獲した。十年に及

ぶ彼の奴隷商人としての年月で、マナウスの雑踏から拉致した女たちの数はたぶん三ケタに近づくはずだ。国籍は雑多だから、もし彼女たちを送り込まれた闇の世界から呼び戻して整列させたらオリンピックの開会式と間違えるだろう。

……今回の獲物は今、彼の前方約百メートルのところを歩いていた。河辺に設営された朝市で、彼女は気に入った被写体を見つけると慣れた手つきで日本製のカメラのシャッターを切っている。

カメラだけではなく、肉体も日本製だった。徹底的に調査する慎重さは、奴隷商人にとって最低限の資質である。衝動的な誘拐は破綻する。身元や職業、身体に傷がないかどうか、といったデータは当然のように頭に書き込まれていなくてはならない。

獲物は日本人であり、“ヒロミ”という名であるのがわかっている。長く美しい黒い髪と黒い瞳、オリエンタルな美貌を持った二十二歳の娘だ。身体は細っこいが均整が取れている。手足が長く顔が小さい。彼女が宿泊している安ホテルの支配人に金を掴ませ、浴室を覗き見させたところによると、肌はスベスベしてまるで処女のようなだったという。予断は慎まなければならないが、男の目にも、そうであっても不思議ではあるまいと映っている。チェックのシャツと色褪せたジーンズに包まれた身体の線はまだ子供のそれのようでもあるのだ。現地の娘

ではありえないが、東洋人の娘は禁欲的に育てられるらしいから、あの歳まで処女膜を残していても不思議ではないのだろう。もしそうであつたら、金満家の客たちに倍の値段をふっかける商売ができる。男は祈りながら”ヒロミ”の跡を追いつづけるのだ。

彼女はある漁師の店に足を止め、今朝、アマゾンから釣り上げられたばかりの巨大ナマズに見入っていた。店の女主人に笑顔で何事か言い、肥満した彼女にそれを持たせると、腰を屈め、カメラを縦に構えてシャッターを何回か切った。黒い髪は今は一本に束ねられて背中へ垂らしているが、それを解いて腰までおろせばじつに見事な光沢としなやかさをもった素敵な黒髪であるのだ。蛾のような白い肌とシルクのような黒髪。東洋人の女を熱烈に所望しているヨーロッパの客たちはきっと泣いて喜ぶに違いない。

さて、誘拐する側にとって素晴らしいのは彼女の職業がフリーランスのカメラマンである点だった。それもまだこの通信社や新聞社とも契約していない駆出しである。奴隷商人にとって何より心配なのは獲物が失跡したあとの警察の捜査の規模と捜査陣の士気なのだが、とくに外国人の失踪となると外交が絡むし観光にも影響があるので捜査は嚴重をきわめるのを覚悟しなければならない。それでも失跡した女がほぼ無職でヒッピーに近いとわかれば、たちまち警察の意欲は衰えるものだ。これま

でもそうだったし、これからもそうだろう。我らが”ヒロミ”がもし特定のプレスと契約していればそこが騒ぐだろうから厄介だったのだが、神はこちらに味方している。

そして幸運はまだあった。ホテルの支配人によると彼女は実家と連絡をとっている様子がないというのだ。すでに独立しきっているか、何かわけでもあるのか、本当のところはわからないが、彼女の親が彼女がここマナウスにいる事実すら知らない可能性もある。となれば彼女の失踪自体、発覚するのはかなり遅れるかもしれないではないか。親の問い合わせがなければ領事館だって動かない。いや、あったって動かない場合が多いのだ。領事館が動かなければ土地の警察も動かない。かくして事件は迷宮入りとなる。

まさに”ヒロミ”は神隠しに遭遇するためにマナウスを訪れたようなものである。

明るく勝ち気な気性なのか、”ヒロミ”はたどたどしい語学力であるのかかわらず、ポルトガル語で女主人と大声で会話している。若々しい横顔が少し上気しているが、化粧ではなく朝市の熱気にほだされているのだろう。切れ長の瞳が笑うと細くなり、すっと通った鼻筋に愛らしい小皺が寄った。

”ヒロミ”はそこを離れ、朝市をドンドンと闊歩していく。男もつかず離れず尾行をつづける。いよいよ彼女は

朝市の雑踏から抜けた。と、急に人影が途絶え、鳥の声がやけに近くに聴こえる小さな公園へ入っていった。やるなら今だろう。男は通りで様子をうかがっている仲間に合図した。仲間が車をこちらに回してくる。

何回経験してもその瞬間は心臓が高鳴るものだ。女を羽交い締めにし、口と鼻を手のひらで覆い尽くし、仲間が運転する車へ引きずりこむ。暴れる獲物の頬を平手打ちし、恐怖心を植えつけ、黙らせる。髪を撫でてやり、シャツのボタンのひとつも外し、自分の運命を悟らせる。そしてこう囁いてやるのもいいだろう。

『お嬢さん、よく見ておくんだな。この町を。この人々を。見納めだぜ。あんたはこれから闇の世界へ行くことになるんだ。もう二度と戻っちゃこれねえ。だからしっかりとその可愛いお目々に焼きつけておくんだよ。美しい光の世界をね』

”ヒロミ”は裸の子供のブロンズ像の前の小さなベンチに腰をかけた。大きく伸びをし、朝の新鮮な空気を吸いこんだ。汚れていない陽光が彼女の美貌を照らした。

ひとつこひとりいなかった。往来にも視線がなかった。車は扉を開けてすぐにでも発進できるようにエンジン音を静かにたてている。男は獲物に近づこうと一歩踏みだした。

その時、”ヒロミ”は何かを見つけたように視線を向こ

うへやり、立ち上がった。女が歩いてきていた。”ヒロミ”が手を振ると、その女も手を振り返した。

男はチッと舌を鳴らし、とりあえず様子を見るため、足を止め、公園の立ち木に身を隠した。”ヒロミ”と女は笑顔で握手をかわした。会話は聴こえるがどうやら日本語らしく男には理解できなかった。

”ヒロミ”と握手している女は”ヒロミ”よりも年上であるようだった。若妻風のショートヘア。利口そうでしかも落ち着きがあった。薄紫の地に白い花卉の刺繍の入ったワンピースにカーディガンを羽織っている。

日本人なのだろうがなかなか肉感的な身体をしていると、男はその女を値踏みした。とんだ邪魔が入ったわけだが、男の頭にはこの女ともども二人揃えて拐かしてしまおうという考えは微塵も浮かばなかった。二人を瞬時に取り押えるのはいかに相手が女とはいえ不可能であるし、それにこの女の正体がわからなくてはどうしようもない。もし日本政府の関係者であった場合、うるさいことになる。リスクを背負うわけにはいかない。

男は車の仲間に計画中止の合図を送った。

”ヒロミ”と女が連れ立って、女が来た道を引き返しはじめた。男はとりあえず尾行してみるとする。

二人は表通りに出、そのまま外国客が泊まる三ツ星のホテルへ入っていった。フロントを通過し、エレベーター・ホールへ向う。それ以上は危険なので追わず、彼女

たちがエレベーターに乗ったのを見届けると男はフロントへとって返した。息急き切った芝居をし、セクシーな制服でピチピチした身を固めている若いフロント系の娘に慌ただしく問い正す。

「今、二人連れの若いジャポネの女が来なかったか？」

娘はうかつに頷くような教育を受けていないらしく、クリッとしたブルーの瞳を怪訝そうにして男を見た。

「どうしました？」

「俺はタクシーの運転手なんだが、これを忘れていったんだ」

男はこんな時によく使う小道具としてつねに携帯している女物の財布を見せた。それで娘の警戒感が薄れたようだ。

「ああ、そのお客さんならいるわ。五階の探検隊の先生ね」

「探検隊？」

「日本の大学の学術調査隊。明日、出発するらしいから、こちらで届けておきます」

彼女は男から財布を受け取ると、金持ちの国の人間にしてはずいぶん安物を使っているんだな、という表情をしてすぐに電話を回しはじめる。

男は車が気にかかるからと言い残しその場を離れた。

チッ、と奴隷商人はホテルの五階を見上げて再び舌打

ちした。どうやらこの獲物はひとまず諦めねばならなくなったようだ。二人の様子から推理して”ヒロミ”は就職したに違いない。カメラマンとして探検隊に雇われたのだろう。アマゾン奥地の探検なら少なくみても二ヵ月か三ヵ月は戻ってこない。今夜決行する余地もあるが、明日の出発を控えて姿を消しては騒ぎが大きくなる。

男は気持ちを切り替えた。東洋人の娘に執着している客にはもう少し待ってもらい、アラブのオイル成金の要求を満たしてやるとしよう。彼の所望はブロンドの白人娘だ。格好の獲物がリストアップされている。スウェーデン人の女子大生。こちらは正真正銘のヒッピーだ。あの巨きな胸とセクシーな腰つきはどうみても処女のものではないので、値段は落ちるとしても客へ渡す前に味見できる特典がある。

まあ、いいさ。”ヒロミ” 帰ってきたら連絡してくれよ。お前ならいつでもどこでも飛んでいくからな。とにかく、肌は綺麗にしておけ。蚊やヒルに食われないように。そして処女を失わないように。

男は胸のなかで投げキスをホテルの五階へ送って仲間の車に乗りこんだ。車は自転車と人と中古の日本車でごったがえす大通りに消えていった。

幻の戦闘部族

「豪華な部屋ですわね！」

大西宏美は部屋に入るなり、感嘆の声を上げた。

「そう？ でもいちばん安い部屋らしいわよ」

宏美にソファに座るようにすすめ、落ち着いた声で言った女は爽やかな笑みを浮かべた。

「先生、それは贅沢というものですよ。私の泊まっているホテルの部屋と比べたら、月とすっぽん、アマゾンのジャングルと富士の樹海くらいにスケールが違うわ。冷房も効いてるし。それにここには共同シャワー場を覗くデバガメ支配人もいないでしょう」

宏美はフカフカのソファなどここ何ヵ月も座ったことがないようなハシャギようで身体を弾ませていたかと思うと、クーラーを見つけ、その下へ行き、シャツの衿を広げて汗ばんだ胸もとへ冷気を送り込んだ。ノーブラらしくストラップは見当らない。

「デバガメ？」

いかにも育ちのいいような物腰と雰囲気を持った女は宏美にオレンジジュースを作ってテーブルへ置き、自分は彼女の正面のソファに腰をおろした。

「そう。若いピチピチの乙女の裸体は国境を越えて男心を挑発するのです」

宏美がおどけるので女は華やかな笑い声をあげた。

「でも汚辱の日々も今日で終わり。フリーカメラマン

大西宏美はやっとスポンサーを見つけ、念願のアマゾン探険に出かけるわけですから。いや、これもすべて岡部先生のおかげです」

「こちらこそ。若くて優秀で意気軒高な、しかも安あがりのカメラマンと出会えて幸運だったわ」

岡部先生と呼ばれた女はそう言い、愛くるしい美貌で悪戯っぽくウインクした。うなじがあらわにならず、耳も半分隠れているほどのショートヘア。ふっくら立ち上げた前髪から冴えた額に一筋、アクセントをつけるようにほつれ毛を垂らしてる。顔の造作には癖がなく、どちらかといえば童顔だろうか。クリッとした目。筋の通った鼻。小さな口。男好きのする顔立ちである。しかも知性が漂い、さらに落ち着きがあるので、彼女が仲間に加わると居る者がほっと安心するような雰囲気があった。

逆に宏美のほうは屈託がなく場のムードをパッと明るくさせる娘である。

「あらら、もっとふっかけるべきだったか。まあいいや。改めて、わたくし大西宏美と申します。よろしくごひいきのほどを」

「岡部君恵ですわ。こちらこそ、よろしく」

二人はかたく握手を交わしあった。

しばらく二人は談笑していたが、それからすると君恵はK大学の人類学の助教授であり、今度の学術調査隊の副隊長であった。宏美とは偶然、買い出しに出かけたマ

ナウスの市場で知り合いになり意気投合したのだ。今度の調査にはプロのカメラマンが必要だったが適当なのが見つからず、頭を抱えていたところにやたらにシャッターを切っている日本人の若い女性が現れたのである。

宏美のほうは仕事にあぶれていた。大学を中退してまでこの道に入ったのだが、ファッションやインテリアといった日常的な被写体ではあきたらず、結局日本を飛び出して世界各地を放浪していくうち、かねてより念願だったアマゾン探険を思い立ち、当地に流れてきたのである。もっとも女一人で出かけられるほどアマゾンは甘くはなく、探検隊に潜りこむチャンスを待つ日々がつづいた。毎日の糧は絵葉書用の風景写真の撮影でまかなっていたが、たいしたものであるはずもなく、退職金も底をつき、さすがのネアカ娘も屈託していたところだった。そこへこの話である。

二人の希望は合致し、話はとんとん拍子に決まった。そして今日、本契約、明日、慌ただしく出発とあいなったわけである。

二人の部屋の扉が開いて少壮の紳士が入ってきた。彼のあとに二人の男がつづいている。

「あなた、カメラマンの方が来てくださってますわ」君恵は立ち上がって紹介した。

「どうも。岡部俊郎です。今回の調査隊の隊長です」なかなかのハンサムだ。白髪が混じったナイスミド

ル。君恵の夫である。話には聞いていたが、会うのは初めて。宏美は一礼をしながら握手を交わした。

「こちらは我々の助手の鈴木君——」

鈴木は眼鏡をかけてひょろっとし、どこか腺病質的な印象の男だった。

（シャーレの中で培養されたモヤシみたい……）宏美は内心、クスッと笑い、彼とも握手した。年齢は二十代半ばくらいか。

「そして今回の旅の通訳兼ガイドに契約した根古健太さん。君恵とも初めてだね」

根古はややポルトガル語の訛りをもった日本語で挨拶をした。頭が生え上がっているので老けて見えるが、妙にテカテカしている顔の色艶からしてもまだ四十代くらいではなかろうか。岡部よりも若いと思われる。腰が低くて、雇い主の君恵はもちろん、宏美にまでしつこくペコペコとお辞儀を繰り返した。

（第一印象はよくないな。このオジサン）

と、宏美は思ったが、それは君恵も同感のようであった。根古が視線を外した隙に君恵は宏美にヤレヤレといった当惑の苦笑をよこしてきた。女に嫌われるタイプかもしれない。

五人はふたつのソファに座り、中央のテーブルに広げた地図と衛星から撮影した数枚の写真を囲んだ。

「今回の調査は……」

隊長である岡部が説明をはじめ。いかにも学者タイプで、研究に打ち込んでいるときが一番の幸せという感じである。世間のことにはまるで疎く、それらはすべて君恵に任せっきりと宏美は想像した。しかし君恵の岡部を見る眼差しはあくまで優しく愛情に満ちたものだったので、宏美は暖かい気持ちになった。二人は年齢的にかなり離れているが——十五は違うだろう——年下の君恵が岡部を大きな愛でもって包み込んでいるのだ。岡部のほうも安心しきって君恵を頼りにしている、そんな関係が二人の間には成立しているようだった。むろん君恵も学者であるから研究の面においても貴重な理解者・協力者であるのだろうが、それ以上に精神的なパートナーに違いない。

宏美は難しい専門用語を並べたてる岡部の話に頭痛をもよおし、カメラを手にして部屋の反対側へ行き、パチパチとシャッターを切りはじめた。

君恵は肩をすくめてクスクスと笑い、生真面目な鈴木は非難がましい視線を送ってきた。岡部はちっとも気にする様子を見せず、憑かれたように地図をなぞっている。根古といえはほんの一瞬ではあるが、暗い陰険な皺を眉間に寄せ、すぐに元の作ったような笑みを浮かべた。その表情の移ろいは時間にすれば一秒の何十分の一だったろうが、常日頃、ファインダーの中の人間の瞬間の表情を追いかけてきたプロの宏美は見逃さなかった。

ハッとして君恵を見たが、彼女はあごに片手をやって前傾し、岡部の話に聞き入っている。どうしたものかと宏美は迷った。かいまみせた根古の表情は犯罪者のものだったような気がするのだ。よく往来や雑踏の写真を撮っていると、脛に傷のあるようなチンピラのギャングが寄ってきてカメラを奪い取ろうとするケースがある。彼らは写真に撮られるのを極度に嫌がるのだが、その時の表情が今の根古の表情とたしかに酷似していた。しかしそれを言っても一笑にふされるだけであろう。何しろ日程は切羽つまっているし、岡部の言葉の端々にはベテランガイドとしての根古を信頼しきっている色が濃いのだ。今日、初めて雇ったヒッピーもどきの小娘の忠告など聞きはすまい。

（きっと私の思い過しなんだわ）

宏美は自分に言い聞かせた。せっかく掴んだチャンスをつまらないうことで失いたくはない。

「……で、最終的にはブラジル・ペルー国境沿いのアマゾン最深部に入り、カビ族にコンタクトするわけだ」

カビ族？ 宏美はえっとファインダーから顔を起こした。カビ族の名は宏美も耳にしたことがある。文明を徹底的に嫌い、いまなお孤絶して生きるジャングルの民。それがカビ族につけられた一般的な形容だが、実態はほとんど謎に包まれている。カビ部族など伝説にすぎず、実在するものではないと反論する学者もいる。しかし宏

美はここマナウスで幾度もカビ族の噂を聞いていた。とくに物売りにくるインディオからは生々しい話が伝えられている。彼らはカビ族の話をするとき、身の毛もよだつといった顔するのだった。曰く、カビ族とはアマゾンでもっとも兇暴な戦闘部族であり、他のインディオの村や集落を襲って略奪の限りを働くのだそうだ。最も恐ろしいのは捕まえた捕虜のうち、男は去勢され、女は彼らのハーレムの一員として奴隷の扱いを受けるとする報告だ。日常、カビ族の男も女も誰一人として働かない。労働はすべてそういった奴隷たちがし、苛酷な扱いに耐え切れず力尽きていくと、またその補充のために戦闘に出かける暮らしをつづけている。奴隷の売買も行なっているらしい。

「カビ族の存在は疑う余地のない事実だと私は信じている」

岡部はパイプに葉を詰め込みながら断定した。

「しかし彼らに関する噂のほとんど乃至すべては眉唾であるとも信じているのだ。白人がインディオを掃討するための大義名分として流した中傷であり、またはジャングルの神秘性を高めるためにインディオたちが作り出した迷信であるはずだ」

君恵と鈴木が頷き、根古も大げさにウンウンと首を縦に振っている。

「想像するにカビ族はほとんどのインディオがそうで

あるように平和的で友好的で、自然を慈しみ伝統を愛する尊敬すべき部族に違いあるまい……」

「だけど……」と、宏美は口を挟んだ。皆一斉に自分のほうを見たのでいくぶん緊張しながら言った。

「いや、そのつまり……私の知り合いのインディオはかなり具体的にカビ族の行状を説明するわけです。捕まえた女の捕虜には身体のアちこちにピアッシングをするとか、ハーレム用の女と使役用の女を処女かどうかで分けるとか、まあ、そういったことを細かく言うわけです。とても迷信とは思えないのですが」

「そりゃ、君、それはないでしょう。実によくできた迷信なんて世界中、どこにでもありますよ。聖書を見なさい。微に入り細に入り書いているじゃありませんか」

と、鈴木はキンキンした声でまくしたてた。

「ああ、なるほど、それはそうかもしれませんね」

宏美は鈴木顔を近づけざまに撮った。

「でもインディオ同士が戦争をして勝利者が敗北者を奴隷にする話はかつてよくあったでは？」

「うむ。戦争はあったさ」

岡部が気難しげに言った。

「奴隷もいた。けれども文明人と呼ばれている我々の歴史にだって同じことはあったのだよ。悲しい事実だが人間には避けられない歴史的限界なのかもしれん。しかし、だからといってカビ族がそうである証拠にはならな

い。カビ族に対する侮辱——真に科学者の態度を全うするならばそう言うてはならないのかもしれないね。なぜなら我々はまだカビ族に会っていないのだからどんな断定も控えるべきなのだ。だが私は確信している——そういった侮辱の根っこには民族差別があり、非西欧文明に対する偏見がある。ハリウッドの三流映画のアマゾンの描き方を見たまえ。残念ながらあれが文明人を自負する我々の平均的な理解度かもしれないよ」

「主人は、いや隊長は……」君恵は岡部の手に自分の手を重ねながらつづけた。ほっそりとした白い指が眩しかった。「そういったアマゾンに対するすべての偏見をなくすためにも今回の学術調査が重要だと考えているのです。だからこそプロのカメラマンが必要だったのよ。素人では失敗が多く、決定的な瞬間を逃す場合もある。今回はそれは許されないの。大西さん。カビ族のことをすぐに打ち明けなかったのは悪かったわ。打ち明けると敬遠する人が多いものだから……。岡部の口から直接、話を聞いてほしかったの。もちろん最終的な判断はあなたが下すことよ。願わくば、あなたのその若々しい感性と誰にも負けない正義感で、見たありのままを撮影してもらいたい。きっと素晴らしい仕事を共有できると思う」

宏美の気持ちは決まっていたし、岡部と君恵の話を聞いてますますそれは固まったといってよかった。意地悪

く質問したのは彼らがただのインテリでインディオの文化と生活を見下し、自らの学術的成功のみを追求するような人種であれば困ると思ったからだ。宏美なりの資格試験というわけである。君恵と付き合っていればそうではないことはわかっていたものの、一応、念を押して無駄はあるまい。胡散臭いガイドは気になるが、ようするに使用人だ。雇い主がしっかりしていれば問題はないだろう。

宏美はカメラから顔を起こし、みんなを見て微笑んだ。

「ご一緒させて戴きますわ。すでにデバガメ支配人のいるホテルは解約してしまいましたからね。あなたたちに置いていかれたら寝る場所也没有ですよ」

君恵だけが声を上げて笑った。

「なんだ、デバガメって？」

岡部が君恵に尋ねた。

「いいのいいの。さあ、根古さんと打ち合せよ」

根古の話によると、女性が二人もいるパーティなので荷運びの人数は余裕を持たせたいということだった。

「すでに手配した荷運びは五人だが不足かね」

「うーん……」根古は腕組みして地図を見渡した。

「まず心配はないと思いますがね。こういった仕事をこなしてきますと、どうしても最悪の事態を前提にして考えてしまうんですよ」

「最悪の事態ですか？」と鈴木。

「ええ、荷運びが途中で逃げてしてしまう……いやなにね。先生がお雇いになった人間が信用できないというんじゃないんです。あくまでこの調査旅行を成功させる観点から考えるときにですね。二重三重のフェイルセーフと申しますか、事前策を講じておいて損はないと思うのです。なにしろジャングルの奥地ですからね。全員が逃げてしまえば終わりですよ。男性三人、女性二人では運べる荷物も限られる。そうなれば食料を探すのが先決で調査どころではなくなってしまう」

「たしかにそうだが、今から補充といってもね。ただでさえカビ族の名前を出すと皆、顔色を変えてウンと言わないのだから」

岡部は途方に暮れたようにパイプの煙を吐き出した。

「でしょうな。それはまあ仕方のないところです。もしですねえ。先生さえよろしければ私が三人ばかり調達してきましようか。いやいやご心配なく。こいつらとは何度も一緒に仕事をしてまして気心が知れてますから太鼓判を押せます。勇気も人一倍ですし」

「しかしねえ。ここまでで資金のほうがもうギリギリなんだよ。新たに三人雇うとなると……」

助けを乞うように岡部は鈴木を見た。鈴木が経理を担当しているのだろう。帳簿と電卓を膝のうえに広げながら鈴木は長考に沈んでいたが、

「辛うじて一人分ですね」と、泣きそうな声で言った。

「じゃ、こうしましょう」

根古がウンウンと自分の考えに頷きながら提案する。

「とりあえずその一人分を頂きまして、残りは私が立て替えておいて帰ってから払っていただくのです。カビ族とコンタクトすればテレビや雑誌が放っちゃおきませんよ。二人の人件費なんかすぐに捻出できるでしょう」

「しかしそれでは……」

岡部が驚くのも無理はない。宏美も根古の気前の良さにはびっくりだ。こんなガイドがどこにいるのだろう。

「私はようするに先生に惚れたんですよ。いや、難しい学問のことはわかりません。僭越な言葉を許して頂けるならば、先生夫妻の情熱と仲睦まじい夫婦愛に惚れたとっていいでしょう。そればかりは私みたいな無教養で不粋な男にもわかります。なんかこう、お二人にはあったかいものを感じるんだなあ。ほだされましたよ。あなたがたの人間性に。だからこの程度の支援くらいさせてくださいな。なーに、私だってビジネスでやっている。家に帰れば七人の息子と妻がいる。料金はまかりませんが、時間をまけようってわけです。いかがでしょう？」

「根古君——」

岡部は感動したように声を上擦らせた。

「君さえ良ければその三人の仲間に話をしてみてくれないか」

「ようござんす」

さっそく男たち三人は出かけていった。

「大丈夫かしら。あのガイド……」

宏美は胸の疑念を呟いた。

「料金をもち逃げするガイドは知ってるけど、後払いでいいっていうのは聞いたことがない」

君恵もそれには同感であるようだった。

「ちょっと注意は必要かもしれない。でも代わりはいないんだし……」

根古はポルトガル語やスペイン語はもちろん、インディオの言葉も巧みに使えるのだ。地理にも詳しく経験も豊富である。対して岡部や君恵は英語はペラペラであるものの、その他はたどたどしく、現地語となるとお手上げだ。根古はなくてはならない存在なのである。

「でもやっぱり気になる」

宏美は納得できないように首を傾げる。君恵はその様子を見て微笑した。

「あなた、もうすっかり私たちの一員になってるのね。今日雇われたばかりだって言うのに」

「だって……」

「いいのよ。多少、胡散臭いのは仕方がないわ。紳士ばかりが有能というわけじゃないもの。私たちの思い過

しかももしれないし。彼の言葉どおりだったらどうする？ それにもし予感通りだったとしても、じゃ、いったい彼は何を企んでいるのかしら。我々は黄金掘りじゃないのよ。戦闘部族と噂されるカビ族に会いにいくんだから。それとも大西さん、何か心当たりあるの？」

そう言われてしまえば返す言葉もない。情報が少なすぎるのだ。せめて出発までにもう少し時間があれば調べられるのに。探偵の真似事も大好きな宏美である。

「大丈夫。何も心配しないで。あなたはしっかりカメラの手入れをしていて頂戴。あなたの腕にこの調査旅行の成否がかかっているといってもいいんだから」

優しく宏美の肩に手を置いた君恵。本当にチャームングだ。本物の女の魅力がある。身体もふくよかで岡部の愛情を一身に受けていることがわかる。自分にも結婚してもいいと思えるような男性ができて二人で何年か生活すれば、こんなにしっとりとした女らしさが生まれるだろうかと宏美は考えた。とても無理だな、私には。このお転婆は一生治る見込みがない。宏美は地図を片付け、ジュースの入ったコップをキッチンに運んでいく君恵の後ろ姿へ羨望の眼差しを送る。ラフな感じのワンピースに包まれているのに腰は丸く豊満でセクシーなラインを見せていた。胸もたぶん見事に成熟しているに違いない。残念ながら今の宏美にはどう頑張っても太刀打ちできない官能美であった。宏美は自分が二十二歳のこの歳

になっても男を知らず、バージンである事実を少し恨めしく思った。機会がなかったといえればそれまでだが、やや写真に打ち込みすぎたのかもしれない。仕事と愛情を両立している君恵に出会って、いつになく胸が甘酸っぱくなってしまった。

しかしいつまでもセンチになってばかりもいられない。ホテルに帰って荷造りをしなければならないのだ。ああ冒険！ 子供の頃からの夢がとうとう明日、かなえられるのだ。恋愛はやはり後回しである。

旅立ち

結局、総勢十三人の大所帯となった。

翌朝、彼らはアマゾンに突き出した栈橋に集まった。

アマゾンは大河だ。河口から千六百キロも上流にあるここマナウスの地でさえ、その河幅はゆうに数キロはあるに違いない。こちらから向こうの川岸が朝霧に霞んで見えず、茶色の濁流が轟音を響かせ波立ちながら悠々と大西洋へ向かって流れていた。乾期の今はこれでも水量が少ないほうなのである。

岡部と君恵は彼らが雇った五人の現地人の荷運びたちに大声で指示をだしている。これから水路、調査隊を運んでくれるボートはとてもスリムとは言えなかったが頑

丈そうで頼もしかった。すでにエンジンがかかり、岡部たちは大声で指示しなければならなかった。荷運びたちはその指示によく従って勤勉に荷をボートへ積んでいった。

栈橋には他にも明け方から漁に出ていた漁師の船やこれから出ていこうとする船でごったがえしている。彼らは道をあけると怒鳴りあい、オーバーな手振り身振りで行っている。彼らの妻や家族もとった魚を岸にあげるべく待機しており、けたたましく漁の多少に口をだしていた。

アマゾンの朝はそのように活気に満ちている。

宏美はその光景をカメラにおさめるべくシャッターを切りまくっている。ひょうきんな荷運びの連中とはすぐに仲良くなり、宏美がカメラを向けると彼らはおどけたポーズをとってアルコールで焼けたような声でよく笑った。隊長と副隊長はお揃いの、『これぞ探検隊』の衣装だった。半袖の上着、半ズボン、丸いつばの帽子、そして首に赤いスカーフを巻いている。君恵の美貌は昨日よりもまた一段と輝いているようだった。化粧は少ししていたが肌の艶がよくすっきりした顔をしている。きっと調査旅行中はできないであろう夫婦の営みを昨夜、すませたに違いない。カメラを向けると彼女はやや照れて顔を伏せるように荷の札をチェックする作業に専念した。

宏美は昨日と同じ服装だった。チェックのシャツにジ

ーンズ。代わり映えのしない売れないカメラウーマンのユニホームと言ってもいい。

船長とルートや料金の確認をしていた鈴木が顔をだした。彼はいつでも青白い顔である。熱帯の四十度にもなる太陽の下でも同じだ。日焼けをしない体質なのだろうか。それでもいよいよ出発なのでいくらか頬が上気しているかもしれない。

ずいぶん遅れてガイドの根古と彼が雇った三人の男たちが到着した。栈橋一帯に一瞬、緊張が走った。三人の男たち——暗い目をした大男たち——がそれぞれ銃をもっていたからだ。治安がいいとは言えないマナウスでも軍人や警察以外で剥き出しの銃を肩に担いでいる人間はあまりいない。平和で小心な漁師たちが驚くのも無理はない。

根古は遅刻をしきりに恐縮していた。いつものように誰かれなく頭を下げまくり、齒の浮くようなお世辞を言いくった。三人の男——彼らは荷運びに雇われたのにちっとも手伝おうとしなかった。すでにあらかた運びこまれていたとはいえ、力仕事には無関心の顔をしている——は他の荷運びたちに侮蔑的な視線を飛ばし、そして宏美と君恵には鋭い視線を向けていた。露骨な好色の視線とは言えないものの、やはり女を見る目つきとっていいだろう。宏美は癢に触ったので挨拶もせずさっさとボートへ乗りこんだ。

副隊長はそうはいかない。君恵は初めての三人とそれぞれ握手を交わした。彼らは笑顔のひとつも見せずに、君恵の柔らかい手を握り締め、彼女の美貌を無遠慮に覗き込んだ。しかし君恵はさすがに落ちついている。ビクビクするような素振りなどおくびにもださず、雇い主としての威厳を保ったまま挨拶を終えるのだ。

根古は岸からボートのうえの宏美を指差し、ポルトガル語で『あれがカメラマンのお嬢さんだ』と三人に紹介した。宏美は挨拶代わりにカメラを向けて三人を撮った。三人の銃を握る手が一瞬、こわばったような気がした。が、根古が制するように彼らの前に立ち、宏美に手を振った。

「いやあ、お嬢さん。こいつらにカメラは勘弁して戴けませんか。人生だれしも失敗がある。とくに若いときはね。その失敗の程度がマナウスと日本では違うんです。お嬢さんも長くここに住んでいらっしゃるんだからわかるでしょう。日本の交通事故のようにここではカメラに撮られることを嫌がる事件が頻繁に起こっているんです。そういう体験をしていない若者を捜すほうが難しいでしょうな。是非ともご理解のほどを」

宏美はわかりましたと言って、男たちに一応謝罪したが根古の言葉には嘘があると思った。たしかに日本のように治安は良くないかもしれないが、宏美の知っているマナウスの人々はお節介ではあるけれども優しく、情が

あって温厚だ。犯罪を侵しているのは一部のギャングたちで、それも外国人である場合が多い。根古の言葉は承服しがたかったが、記念すべき出発の間際でもあり、宏美はそれ以上かかずらあうのをやめにした。

さて、全員がボートに乗船し出航の汽笛が鳴らされると、棧橋にきていたオバサンや子供たちが手を振ってくれた。

「探検隊に神のご加護を！」

彼女らは口々にそう叫んでいた。K大学人類学研究室奥アマゾン学術調査隊はこうしてにぎにぎしく大河に船出し、秘境アマゾンの大密林めざしてその一步を踏みだしたのである。

まもなくボートは茶褐色に濁った河の中央へ進み、安定した航路で上流へと舵を切った。

隊長の岡部教授は根古をボートの隅に呼んで三人の男たちの銃の携帯について相談しはじめた。

「根古君。あれはいったいどういうことかな。彼らは荷運びじゃないのかね。それなのに銃など持ってきて。他の連中を刺激するじゃないか」

根古は如才なく立ち回った。

「何事にも妥協は必要なのです。彼らの言い分だって少しは入れてやりませんか。なにしろカビ族を見つけだそうって探検なんですから、彼らの恐怖心も理解できないわけではない。保守的で迷信深い連中ですからね。」

最後に頼りなるのは銃だと考えているんです。もし強権を発動して銃を没収してしまえば彼らはおりてしまいますよ。この河のなかに飛び込んで泳いで帰ってしまうでしょう。これははっきりしております」

根古は慎重に指摘することを避けているが、言下に賃金の滞納を匂わせている。この三人の賃金を払っているのは自分でありあなたではないのだから自由にさせてもらいたいとほのめかしている。先生に惚れた、先生夫婦の愛情にほだされたなどとうまいことを言っておきながら、こういうところはきっちりと押さえてくる。根古はやはりしたたか者なのだ。そして岡部の顔を立てるのも忘れない。

「いや、それにしても裸のまま肩に担いできたのはまずかったですな。私の監督不行き届きでした。これからきちんと収納しておき個人個人で厳重に管理するよう徹底しておきますから。まことに、まことに申し訳ない——」

「頼むよ、君、銃なんかボートをおりて陸にあがってからでないと意味ないんだから。それも万が一襲撃されたときだろう。それだってありゃしないと思うがね」

「は、は、すまんことでした、ハイ——」

教授はそれ以上、追及しなかった。やはり負い目があるのだろう。イライラしたように根古に背を向けると心配そうにこちらを見ていた君恵のもとへ行き、何事か会

話をし、彼女の肩を抱いて操舵室へ向かった。肩越しに君恵の非難がましい視線が根古に向けられた。岡部に抗議を言わせたのが君恵であるのは明らかだった。そういう折衝には不慣れな夫の尻を叩き、誰がリーダーなのかははっきりと示すべきだと主張したのだろう。根古はカメ虫の甲羅のようにテカテカ脂ぎった禿げ頭を掻きながら君恵に恐縮してみせ、何度もその頭を下げた。根古にとっては学問一筋で世間知らずの岡部よりも、聡明で洞察力にすぐれた君恵のほうが手強い相手といえそうだった。だから恐縮して細めている目が時折鋭く尖って刺すように向けられる相手は岡部ではなく君恵なのだ。

この一悶着を積み上げられた荷物の影から一部始終目撃していた宏美にはこのガイド兼通訳がなんらかの下心を隠しているという確信をもたざるをえなかった。その下心とは何か、むろん宏美にはまだ想像もできなかったのだが……。

船旅は概ね順調に推移した。河幅は徐々にではあるが狭まってき、源流に近づいていることをうかがわせた。河岸には泥に洗われたマングローブが密集し、あるいは熱帯の樹木が迫っている。雨期になるとそれらは水没し、激しい流れが土を削って根が剥き出しになり、やがて濁流に引きずりこまれ流木となるのだろう。概して植物は単調であったが、たまにけたたましい鳴声を轟かせて視界を横切っていく色鮮やかな野鳥の姿は、娯楽とい

えばカードくらいしかない乗員たちを楽しませた。

その頃には宏美はすっかり荷運びたちと打ち解けていて、野鳥の名前やそれにまつわるインディオの伝説などを聞かせてもらい、彼らの知識の深さに感銘を受けていた。

「ヒロミ、あの紅の鳥がいるだろう。あの鳥は昔、人間だったんだ。可愛い娘だったんだと。彼女には恋人がいて、幸せな日々を送っていたがある日狩りに出かけたその恋人が精霊の美貌に惑わされて森に入ったまま帰ってこなくなった。娘は嘆き悲しみ、毎日泣いて暮らしていたら、不憫に思った神様が出てきて鳥に変えてくれたんだ。彼女は森の中を自由に飛び回れる羽をもらって、恋人を捜しに出かけたそうさ。だからあの鳥は森のいちばん高い木よりうえには高く舞い上がれないんだよ」

話を聞かされると宏美は思わず涙ぐみそうになりつつ、シャッターを切るのである。

しかし仲良くなったのは五人の荷運びたちで、例の三人組とは依然として没交渉であった。彼らは根古以外の人間とは話を交わしていない。雇い主であるはずの岡部とも君恵とも挨拶にちょっと会釈する程度である。鈴木は完全に無視している。他の荷運びたちのカードの輪にも加わらない。

「あいつら、いったいなんだ？」

彼らも気味悪がって敬遠している様子。岡部は——実

際は君恵が後押ししているのだが——再三再四、みんなと打ち解けてチームワークを構築するようと、根古に要請しているのであるが、根古は岡部の前ではへり下ってハイハイと媚びた返事をするものの、まったくその気はない様子であった。根古はしかし五人の荷運びたちとはうまくやっている。方言のきついポルトガル語や隠語を含んだインディオの言葉を巧みに使って彼らを安心させ、宏美らにはわからない会話をしてすっかり信頼を得ている様子であった。

「根古さんと何を話しているの？」

宏美は最も仲良くなった年長の一人にそっと尋ねてみたが、彼は笑って教えてくれないのだ。

「ま、女子供には関係のない話だな」

「いやらしい話ね！」

「そうとばかりも言えないけどな。フフ、ヒロミには伝説や民話のほうがお似合いだよ」

やはり彼らには男尊女卑の伝統がまだ色濃くあるらしく、宏美などは時として子供扱いであった。それはそれとして猥談程度ならばいいとしても、根古が岡部や君恵よりも信望を集めるのはまずい事態と言えないだろうか。

宏美はさっそく君恵に報告した。君恵の表情は暗かった。

「わかってるわ。だけど岡部に言ってもなかなか動こ

うとしないのよ」

「副隊長から一言、厳命したら？」

君恵は首を振った。

「彼らは女に指示されるのを極度に嫌うのよ。根古もそうでしょう。ブラジル暮らしが長いから。かえってマイナスだと思うわ」

「でもなんとかしないと。このままでは指揮権が奪われてしまうかも。陸にあがればもっと増長してくるんじゃないかしら。根古は地理や土地の習慣に詳しいのだから、尊敬は向こうへ集まってしまう」

「そうよね。その通りだわ。きっと……」

そこまで君恵が言いかけてはっと口をつぐんだ。宏美が振り返ると根古本人がニヤニヤしながら立っていた。

「何の相談ですか。問題でも起きましたか」

宏美は慌ててその場を繕い、君恵を岡部が寝ている方へと追いやった。

「根古さん、立ち聞きですの。いいご趣味なこと」

「立ち聞きなんてしてませんよ。何か私の悪口でもおっしゃっていたんですかな」

根古はニヤけた表情をそのままに宏美の顔を覗き込んでくる。きついヤニの臭いが顔にかかってきた。

「悪口を言われる心当たりでもあるんですの？」

壁を背にしているので逃げられず、宏美はとっさにカメラを彼の顔面に向けてファインダーを覗いた。カメラ

を向けられると人間は罪悪心を引っ込めるものだ。もちろん軽犯罪に限られるのだが。珍しく根古は不機嫌そうな顔になってレンズを手のひらで覆った。

「やめてもらえませんかね。そうバチバチと自由勝手に写真を撮るのは。こんな顔にだって肖像権くらいあるんですから」

「レンズに触らないでください。指紋がついてしまいますよ」

つい声が大きくなってきて、心配した岡部が近寄ってきた。

「どうしたんだね、君たち」

岡部が顔を出すと根古はガラリと態度を変えて、また笑顔に戻った。

「いやいやなんでもありませんよ。このお嬢さんが、あんまり熱心に写真を撮影するものだから、ここでフィルムを使いすぎたらいざというとき困らないんですか、と、ちょっと素人の疑問をぶつけてみただけです。なんの問題もありません ねえ？」

と、根古は宏美に向かって同意を求めた。

「本当かね、大西君？」

「まあ、そういうところですね」

宏美も頷くしかない。それにしても根古の二面性を垣間見たような気分であった。彼への不信感はなお高まった。

「あ、根古君、ちょっと……」

岡部がバツが悪そうに根古に言い、甲板のほうへ連れ立った。君恵の注進を受けて岡部がようやく重い腰をあげたのだろう。

たしかに岡部の根古に対する訓告は効果を上げたといっているかもしれない。その後、根古は必要以上に荷運びたちに近づこうとはしなくなった。近づくときは岡部や君恵が荷運びたちへの通訳を求めるときだけだ。愛想の良さはそのままである。揉み手をし、ゴマをすった。通訳としての能力の高さ、ガイドとしての知識の深さ、これに異存のあるものはいなかったのも、彼の評価は上がりこそすれ下がることはなかった。

岡部隊長はすんでのところリーダーシップを発揮し、指揮権を取り戻したかに見えた。いや、ボートのうえではそれはその通りだったのである。

ただし、根古が謹慎したときを境に宏美の近辺で不審な事件が頻繁に起こるようになった。たとえば新品のフィルムが入っていてケースが紛失していた。こんなものを盗む人間はいないだろうから、宏美は最初、自分の不注意でなくしたのだろうと思っていた。細かいことにこだわらない性格の宏美にはよくある事件なのだ。二日後、今度は撮影後のフィルムがひとつ見えなくなった。これはありえないことだ。宏美は若いとはいえプロだ。自分が撮ったフィルムの管理は万全である。なくすよう

なへマはしない。完璧に盗難である。たいした写真でないのだけは幸いだったが、いったい誰の仕業であろうか。

それはわかりきった話であった。根古がやったに違いあるまい。もしくは根古の部下と呼んでもいい、あの三人組だ。これは嫌がらせである。宏美が君恵に根古の様子を報告したのを密告と逆恨みしたのだろう。

しかしこの件を君恵には言わなかった。とりあえず証拠もないのだし、いかんせんボートのなかは狭すぎる。不審がつのるとどのような形で爆発するかもしれない。この程度——幼稚なしっぺ返し——であれば宏美の胸ひとつに収めておけばいいことである。

だが事態はもっと陰湿になってきたのだ。フィルムが紛失してから二三日後、真夜中のことだ。満天の星に夜行性の獣の吠え声が兩岸のジャングルから聴こえてくる、これぞアマゾンと呼ぶにふさわしい夜だったのだが、宏美はトイレに起きたのである。一行はボートにしつらえた二十畳敷きの広さの部屋——もともとは家畜を運搬する船なのだそうだ——にざこ寝する形で睡眠をとっていて、君恵と宏美だけはカーテンで仕切られた空間を作りそこで休んでいるのだが、宏美はそのカーテンを開け、獣の遠吠えより不気味な男たちの鼾に苦笑しながらトイレへ行った。トイレもいたって簡単なもの。西洋便器の下はすぐアマゾンの大河の流れとなり、お尻をだ

して座っていると川面の飛沫がピタピタ当たってくる豪快なシャワー式水洗トイレだ。

寝呆けながらも宏美はジーンズを膝までおろし、パンティをクルリと剥きおろした。夜風と河水の冷たさが股間に忍びこんでくる。靄のような慎ましやかな彼女の恥毛が縮み上がる涼気である。背後は船体の鉄壁だったが、それ以外の三方は薄っぺらなトタンを張り合わせたもの。そして低い。宏美の身長でも立っていると目が出てしまうくらいだ。つまり天井がなく吹き抜け状態。日本の甘えたOLであれば尿道がすくんでとても排泄など不可能であろう。しかし宏美はいっこうにかまわず、尿を迸らせはじめた。トイレに座りながら星座をウォッチングできるなんて最高の贅沢だ、くらいにしか思っていないのだろう。慣れもあるが、そういう性格なのだ。アマゾン河の流れ——ようやく水量が減ってき、蛇行が多くなってきていた——へ細い尿の放物線を飛ばしながら宏美は大きなあくびをした。

「ン？……」

その拍子に背筋をのばし、顔をあげた瞬間、低い仕切りの上から覗き込んでいる男の顔に鉢合わせした。いや、正しくは男の顔ではなかった。仮面である。縦縞のペイントをした原住民の顔を模した仮面だ。頭の部分に鳥の羽を刺したデザインである。目のところはくりぬかれており、そこだけは仮面のしたの本人のものが見え

た。濁り濡れた瞳がじっと放尿している宏美の股間へ注がれている。

「……な、何をやっているのよ……」

大声で叫びたかったのだが、あまりの驚きに喉が擦れたようになってしまった。あろうことか、仮面の男——女でないのはたしかである——は中へ長い棒を差し入れてきた。搦んでいる部分は細く、しだいに太くなっていくバットのような形状の棍棒だ。戦闘部族の代表的な武器のひとつであり、町ではそれを土産として売っているのだ。

仮面の男はそれでいきなり、彼女の股間をドンと突いたのである。

「痛ッ……」

狭い空間であるからたいした勢いではなかったが、冷たく堅いそれは繊細で柔軟な処女の性器に大きな苦痛をもたらした。尿はハタととまり、宏美は股間を押さえて身体を折った。抗議しようと顔をあげたがすでに男の姿はなかった。

（いったいこれは……）と宏美は思った。誰の仕業か。むろん容疑者の特定は簡単だ。根古の一派に決まっている。手首や首の肌の色からして——それに頭も禿げていなかったようだ——根古本人ではないだろう。三人組の一人にやらせたのだ。しかし告げ口の仕返しにしては度がすぎてはいないだろうか。これはれっきとした暴

力行為なのだ。しかも女性の象徴を狙う卑劣なやり口である。

次の日、宏美は君恵をデッキに呼び出して事の仔細を話した。

「ひどいわ。それは……」

君恵は絶句した。そしてすぐにもみんなを召集し犯人探しをしなければと、戻りかけた。宏美はそれを遮った。

「どうして？ あんまりだわ。凶器を用いるなんて」

「でも痣も傷も残っていない。証拠は何もないんです」

「だけど……」

「シラを切られればそれまでだわ。仮面を剥ぎ取ってやれば良かったんだけど」

宏美は唇を噛む。本当ならばこれも内密にして君恵に余計な心労をかけたくなかったのだが、ことがことだけに耳に入れておいたほうが良からうと思ったのだ。

「嫌がらせが私にだけ向けられているなら問題はないと思う。奴らもこの調査旅行自体には反対ではないのでしょう。生意気な女の子を懲らしめてやれ、くらいのもんじゃないかと踏んでいいと思うけれど。ただ、これが君恵さんにも広まっていくようだと深刻です。注意してください」

君恵は首を振り、表情を曇らせる。デッキの手すりに

身体を預け、狭まってきた河幅の岸のうえに密集するジャングルの森に視線を向ける。憂いに満ちた彼女の横顔の美しさはどう表現していいかわからない。化粧もしていないのに、それに宏美よりも十歳以上年上なのに、ほんの少し日焼けした肌はピチピチしていた。頬にひとつふたつニキビができていること——こういう苛酷な長旅では敏感な女性の肌がそうなるのはやむをえないところであろう——を除けば、しっとり潤いに満ちた美貌を保ちつつけているといい。

「ここまで来てしまったら、もう引き返せないわ」
君恵は自分自身に言い聞かせるように呟いた。

「本当はそうして人選をやり直したほうがいいんでしょうけど……。夫と私はこの計画にもう五年の歳月とほとんどの預貯金をはたいている。借金もかなりあるし。これが最初で最後のチャンスなの」君恵は首を横に振る。「駄目。とても彼には言えないわね。中止しようなんて。死刑宣告も一緒よ」

「わかってますよ」

宏美は君恵の肩に手を置いた。慰めるように軽く握った。

「こういう狭いところに閉じこめられていたら誰でもウサ晴らしをしたくなるもんです。上陸したら事情は変わってくるんじゃないですか。暇もなくなるでしょうし」

君恵は宏美の方へ振り向き、彼女の手を握った。

「助かるわ。あなたが冷静でいてくれて。これからもこんなことがあったら、どんなに小さなことでも私に報告して頂戴」

「そうしますわ。二人で頑張りましょう。この探険を成功させて岡部先生の希望をかなえさせてあげましょう」

——『ヒロミ、お前の舌は動きすぎだ。その舌を抜き取って、掻き切った喉に突っ込んでやる。沈黙こそ美德。おしゃべりは死あるのみ』

これは宏美がフィルムを整理していると、いつぞや見えなくなったケースがどうしたことから出てきて、その中に押し込まれていた紙切れに書き殴られていた文章である。宏美は君恵には言わなかった。次の日下着の一枚がなくなっていたのも黙殺した。上陸が迫っていたので君恵は岡部や鈴木、それに根古らとの打ち合せに慌ただしかったからだ。下船したのちも嫌がらせがつづくようだったら報告しよう、宏美はそう考えていた。

この章の残りは有料本編でお読みください。

#####

セクハラ・ジャングル

「こんなところにデバガメはいないでしょうね」
宏美は悪戯っぽく笑った。

岡部の見張りといっても池を見ているわけではなく周辺を巡回する程度である。

「大丈夫。主人は年増好みだから」

「まあ、ごちそうさま——」

二人は仲の良い姉妹のようにふざけあって服を脱ぎはじめた。水着などないのでスッポンポンになるしかない。

「綺麗だわ。副隊長……」

下着姿になった君恵の身体を宏美は惚れぼれと眺めた。

「いやねえ。宏美さん。ジロジロ見ないでよ」

実際、君恵の肉体は素晴らしかった。サファリウエアはきっちりと身体を締めているから目立たなかったのだが、こうしてみるとその豊満さは同性の宏美にしてもうっとりしてしまうほどだ。ベージュの地味なブラジャーに包まれた乳ぶさはボリュームたっぷりで子供を産んでいないからか形がちっとも崩れていない。ネットリと輝く乳白色の肌は腕や首の日焼けの部分と好対照をなしていっそう艶かしく見える。餅肌でむろん脂が乗り切って

いるため、ムンムンと色香が匂ってくるようだった。

ズボンを脱ぐと、下半身があらわになったがその官能美に宏美は圧倒されそうだった。たしかにウエストには贅肉がついているものの、それはちっとも不快ではないのだ。いやむしろ彼女の女性的魅力を増している。豊かなバストからすぼまっていくウエストは自然な線を保ち、双臀へとつづいている。パンティを貼りつかせたヒップのまるやかさは人妻ならではのものだろう。女性象徴を包んでいるフロント部の仇っぽいふくらみ。そして逞しいばかりの太腿と、君恵のセクシーさは呆気にとられるほどである。

背中に手を回し、ブラジャーのホックを外した。まるでた双つのふくらみは支えているものがなくても、自身の弾力でほとんど垂れ下らない。頂点に尖らせた愛らしいピンク色の乳首が羞かしげに震えているようだった。手で前を隠してパンティを下ろした。君恵は全裸になった。

「早く宏美さんも脱いでよ。私一人じゃ淋しいわ」

「……ええ、もちろん……だけど君恵さんのヌードを見せつけられたらちょっと手が動かなくなるわ」

「まさか。宏美さんなんかとても綺麗じゃない」

「どういたしまして。貧相のかぎりでございますよ」

苦笑しながら宏美はシャツを脱ぎ去った。肋骨が薄く透けるようなスレンダーな上半身があらわれた。

「テヘヘ。向こうむいていてくださいよ」

ブラをとるとふくらみきっていない乳ぶさだった。胸板に双つの丸い円が辛うじて形をなしている。それが成熟の限界なのではなく、男を知り、熱情的なセックスを繰り返せばきっともう少し盛りあがるのだろうけれど、今はまだ君恵と比ぶべくもないペチャパイである。乳首が浅黒く乾葡萄のようで、お転婆な彼女の人となり象徴しているかのようだ。それでも陥没はしておらず、自己主張をしているようにツンと上を向いているのが宏美らしい。肌は若々しく水を跳ねつけるようにピチピチしている。縦長の臍、くびれたウエスト。豊満ではないもののスタイルそのものは悪くない。

パンティを取ると、走り高飛びの選手のようなきわめてしなやかな脚線美が君恵に感嘆の声をあげさせた。

「素晴らしいわ。お尻の形も抜群よ」

なるほどその通り。小さいけれども外人モデルのように格好がいい。クリクリとして身が締まっている感じ。谷も深く贅肉など無縁である。

無頓着に前を隠さないのも恥毛がすっかりあらわであるが、『気の強い女は毛深い』などは迷信である証明のように一掴みの草叢がYの字なりに下腹部に乗っていた。むしろ毛の深さは君恵のそれに軍配をあげねばならない。彼女の押さえた手からチラホラと見え隠れしている下腹部には小判型に見事に生い茂った黒々とした陰毛

が股間の奥まで入りこんでいるようだった。

とにかく二人は全裸になり、恐る恐る爪先を水に浸しはじめる。強い日光を燦々と浴びた二人の肉体——そそけだつ産毛まではっきりと見えるようだったが——は対照的といってよかった。女らしくふくよかで肉感的な君恵の裸体と、肩幅がしっかりとあり、肩甲骨や鎖骨が素敵に浮き上がっているスレンダーな宏美の肢体。処女と三十代の人妻、行動的なカメラマンとどちらかといえば書斎で研究に没頭している女性学者という違いも印象を明確に分けているのかもしれない。

二人ははしゃいだ声をあげながながら池の中央へと進み、途中から身体を倒して泳ぎはじめた。君恵はショートヘアなのでそのままでもよかったが、宏美は束ねていた黒髪をさらに頭のうえに持ってきてピンで止めていた。

池のほとりにある積み重なった岩にのぼり見下ろせば、澄んだ池の水に波紋を広げつつその中心に四肢をのびやかにして泳いでいる裸女の姿を余すところなく眺められただろう。

「冷たい水が気持ちいいわ」

「本当。疲れが溶けていくよう」

笑いあいながら天然のプールを満喫する二人。と、突然、宏美が大声を発した。

「どうしたの？」

慌てて君恵が彼女の傍らへ近づいていく。

「何かが私の身体に触れたわ……」

宏美は両手を水のなかに突っ込んで探っている。

「いたっ！」

彼女が両手で捕まえたのは魚。それを水面まであげようとして激しく暴れる魚と格闘している。とうとうむなびれを挟みつけるようにして水面へもちあげた。それは立派な髭を生やした巨大なナマズであった。

「こいつがエッチナマズよ。私のアソコに背ビレをこすりつけたんだわ」

身をくねらせ、水面を尾ビレで叩くナマズは二人の哄笑を誘うのだった。

それから十五分ほど二人は水浴びを楽しんだ。そろそろ身体も冷えてきたので上がろうと、脱衣したほとりへと引き返した。

「あれ？」

と、先に岸边に上がった宏美が不審の声を発している。

「どうしたの？」

つづいてきた君恵が尋ねる。

「下着がないわ」

服とジーンズの下に隠すように畳んでおいた下着がなくなっているのだ。

「あら、私も——」

君恵も乳ぶさの先っぽからポタポタ雫を垂らしながら

言った。彼女のパンティもブラジャーも跡形もなく消え去っていた。

顔を見合わせている二人の耳に尋常ならぬ叫び声が聴こえてきた。根古の声だった。

「大変だぁーっ。隊長がやられてるぞ！」

声につづいて茂みからヌッと根古が姿をあらわした。

「副隊長、大変です。すぐに来てください。隊長が頭を殴られて——」

「なんですって！」

彼の報告にいろをなした君恵は二三步、駆け出したがすぐに自分が裸体であるのに気づき、あっとその場の衣類を胸に抱いて腰をすくめた。根古の目に、冷水に洗われて光り輝く大ぶりの双乳や跨ぐらの黒毛を見られたのは確実だった。それは宏美も一緒である。

「失礼。とにかく緊急事態なもので。向こうの岩陰です。隊長が頭から血を流して気絶しているんですよ！」

根古はもう一度、ジロリと二人の裸身を舐め回し、早く、と踵を返して茂みに戻っていく。

結果的には根古の表現はオーバーなもので岡部は出血などしておらず、後頭部に大きな瘤ができただけで、君恵と宏美が駆けつけたときにはすでに意識を取り戻していた。

「いやぁ、びっくりしたよ」

ダメージもそれほどではないようだ。

「目の前に身体中ペインティングしたインディオが飛び出してきたと思ったら頭をゴツンとやられて。二人いたんだな、きっと……」

「しっかりしてよ、あなた」

根古の話を聞き、痛々しいくらい狼狽えていた君恵もようやく胸を撫で下ろし、水を濡らしたタオルで彼の額をかいがいしく冷やしている。

「そのインディオ、頭に鳥の羽を二本つけていませんでしたか？」

根古が尋ねる。みんな岡部を取り囲むように集まってきた。三人組は銃を握り締め、五人組は不安げな表情であたりに気を配りながら。

「うーん……そう、そうだ。鳥の羽を頭の両側につけていた」

「ペインティングは縦縞で、赤と緑を交互に？」

「その通りだよ。根古君」

「カビだな。カビ族ですよ」

断定的にいう根古の言葉に動揺が起こる。

「これは警告ですね。これ以上、自分たちのテリトリーに近づくなという……」

「そうか。とうとう——」

岡部は昂奮気味に起き上がろうとして君恵に押し止められた。

「我々はカビ族に遭遇したのか！」

殴られたショックよりも岡部にとってはそちらのほうが重要ならしい。

「……このへんで引き返したほうがよかないですかい？」

五人組のうちの最も年長の男が言った。それが彼らの一致した意見でもある。

「カビ族がいるってこともこれではっきりしたんだし」

「何を馬鹿なことを」

岡部はまったく受けつけなかった。彼にとってカビ族が存在しているのは自明の理であり、問題は彼らの生態が喧伝されているような好戦的なものかどうか、あるいは凶暴な野蛮人であるかどうか、という点なのだ。

荷運びの年長者は大げさな身振りで、それじゃやっぱり帰らねばならないと力説した。

「問答無用で殴り倒すような部族が友好的であるわけがないじゃないですか。噂が本当だってことですよ。カビは恐ろしい戦闘部族なんです」

さあ、それはどうかねえ、と根古が制するように言った。

「こっちだって非はあるんじゃないか。国境沿いに武器をもって進攻し、何の挨拶もなしに侵入しようとするればどんな国だって戦闘的な反応をするだろう。とくに彼らはいわゆる文明のやり方を知らないわけだから、こん

な直接的行動にうってでたのかも。これまで白人が犯してきた彼らに対する罪を考えれば、一思いに隊長を殺してしまわなかったのは案外平和的な部族と考えるのが妥当かもしれないぞ」

「だけど俺たちは怖いよ」

とうとう本音を曝け出す荷運びたち。

「ふん、腰抜けどもめ。いいさ。タダ働きでいいんならとっと帰ればいい。今日までの賃金はすべてチャラだからな。武器もなし、火種もなしで引き返せ。それでも生きて帰れるならマナウスでまた会おうじゃないか」

これには消極的意見も黙り込むしかなかった。アマゾンのジャングルで少人数に分裂するのは何の利点もない。文明の利器が使えないのであれば文明人は生きていくすべがないのである。

「まあまあ根古君。脅してはいけないよ」

岡部はようやく立ち上がりながら優しい声をかけた。

「みんな、よく見てくれ。少なくとも彼らは私に致命傷を与えるような攻撃はしなかったわけだ。しようと思えば簡単に殺せる状況であったのにだ。そしてこのパーティには他に被害はもたらさなかったんだ。今の段階で結論をだすのは早いと思う。カビ族が好戦的か友好的か、もう少し様子を見る必要がある。少しでも危険が大きいと判断される場合は、潔く撤退しよう。そして君たちの個人の判断を尊重しよう。帰りたければ賃金を払

うよ。どうだね？」

岡部の言葉は根古が通訳したのだが、現地語に親しんでいる宏美にも方言がきつくてよく理解できなかった。それでも概ね正確に訳していると思われた。

「ところで隊長——」

「なんだね、大西君」

「さっき被害は私の頭だけとおっしゃいましたが、それは違いますよ」

カメラに岡部の倒れたところから傷跡から丹念におさめていた宏美が顔をあげていった。土埃や汗に汚れていたその顔はすっかり綺麗な美貌を取り戻していた。

「なんだって。何か被害を受けたのかね」

宏美が言うのだから一緒に水浴びをしていた君恵も知っているのだろうと岡部は不安そうに妻の顔を覗き込む。君恵は無言のまま頷いた。

「私と副隊長の下着が一式盗まれたんです」

「下着が？」

岡部が目をパチクリさせている。根古が素早く通訳する。緊張していた場のムードが一気に柔らかくなった。男たちの視線が胸のあたりに集中するのを感じて宏美も君恵もヤレヤレという表情だ。

「カビ族は女性の下着に興味があるのかね」

岡部は途方に暮れたように呟いた。

「男の趣味は民族も国境も越えているわけですね」

根古が面白そうに目を細めながら君恵のたわわにふくらんだ胸——彼の網膜には目撃した彼女の白い乳ぶさが焼きついているに違いない——を見、次に乳首の形が心なしか浮き出ているような宏美の胸を凝視するのだった。

この襲撃事件があってから、一行の口数はめっきり少なくなった。道なき道を進んでいる間も、いつ飛んでくるかわからない弓矢や毒矢の心配をはじめるととても平然とはしてられないのだ。そこまでいかなくとも、この繁茂する樹海のどこかでじっと自分たちを監視しているカビ族の目をどうしても背中に感じてしまうのである。

三日間はどうやらカビ族の怒りを買うことなく前進できた。確実に彼らの内懐に向っている証が随所に見つかった。黒炭化した焚火の跡があったし、目印と思われる人為的な枝の伐採があった。鈴木が発見したのはまだ何日もたっていないと思われる足跡だった。探検隊は休んでいるのに何かに驚いたように鳥たちが一斉に飛びたった時もあった。

その都度、荷運びたちの恐怖は募っていくようで、彼らだけで相談している時間が多くなった。岡部、君恵、鈴木 of 三人は学者らしく冷静な目で事象を観察し、記録し、分析していた。

なぜか根古だけがカビ族のテリトリーに入りこめば入

りこむほど気分が昂揚しているようだった。恐怖が迫るほどテンションが上がっていくのは小心者にはよくある話だが、彼のはまた違った印象を受ける。端的な例では言葉遣いがどんどん横柄になっていくようなのだ。最初の頃は、日本語を知らないのではあるまいかと思われるほど二重三重の尊敬語が岡部や君恵に向けられていたし、同じ使用人であり、二まわりも年下の宏美にさえバカ丁寧な言葉を用いていたのだが、最近では「岡部先生」が「岡部さん」になり、「君恵先生」もいつしか「奥さん」に格下げされている。鈴木などはもう呼び捨てであった。宏美に対しても荷運びたちが愛着をこめて呼ぶ「ヒロミ」という呼称を使いはじめていた。

なるほどジャングル奥深くに進むほど彼の重要性は高まっていくといい。すでに地図や磁石は何の役にも立たなくなっている。頼りはガイドとしての彼の能力だけだ。彼に臍を曲げられたらこの調査旅行の意味は水泡に帰すばかりか、全員の生命が危機に陥ってしまうだろう。岡部が根古に意見を聴く回数が増え、根古はそんなときやたらに尊大な態度を取りはじめていたのであった。

とはいえ、気性の強い宏美にとっては呼び捨てにされるなど耐えがたい屈辱であったが、些細な問題で喧嘩をしている場合でもなかった。

時折、宏美は根古に呼び出される君恵の姿を目撃する

ことがあった。決まって岡部や鈴木が周辺の調査に出かけている最中である。

「奥さん——」と根古は食事の支度や調査資料の整理などに追われている君恵を肩を抱かんばかりにして茂みの影へ連れていくのである。

戻ってきた君恵は伶俐な美貌を青ざめひきつらせていたが、宏美が駆け寄ると首を振って何でもないという。

「あいつが何かしたのでは？」

「いいえ。大西さん、心配しないで。何でもないのよ」

「岡部先生に相談したほうが——」

しかし君恵は首を振って宏美に背を向けてしまう。彼女がカビ族との遭遇を目前に控えて昂奮状態になっている岡部を想って気を使っているのはよくわかる。しかし君恵が口をつぐんでいるのに味をしめたのか、根古はますます増長し、呼び出しは頻繁にそして長時間に及ぶようになったではないか。

何しろ二人——君恵と宏美——は不可抗力だったとはいえ根古にほとんど全裸体の姿を見られているのである。女とは不思議なもので白裸を見られた男性には自分は少しも悪いところはないのに負い目を感じ伏し目がちになるものなのだ。対等に向いあおうとしてもその男の視線が衣服の下を見透かしているようで弱気になってしまう。抗弁しようとしても、『何を生意気なことを。あ

んな巨きなオッパイをぶら下げているくせに』と嗤われているようでつい言葉がでなくなる。うっかりしてると、首根っ子を押さえつけられた、主従の関係さえ発生しかねない。

だからこそ毅然とした対応が望まれるのだが、いや、聡明な君恵だからそのへんのところは重々承知しているはずであるが、根古は狡猾で機敏。状況をうまく利用し、特権を最大に発揮して君恵を陥穽しようとしているのではないだろうか。

その日も根古は君恵を呼び寄せた。疲れたような表情の君恵はフラフラと彼に従っていく。宏美は今日こそは腹にすえかねて二人を尾行した。もちろんカメラをしっかりと握ってである。

茂みの影に身をひそめて覗くと、寄り添って歩く二人の後ろ姿が見えた。やおら、根古の手が君恵の柔らかそうな肩に回り、そっと抱き締めた。嫌悪のために、君恵の身体にピーンと緊張が走ったのが遠目でもわかった。彼女は根古の手を気丈にも払いのけた。しかしその場から逃げ去ろうとまではしない。それをいいことに根古は再び彼女の肩を抱く。再び払いのける。そういった行為が何度か繰り返された。

「いいんですか？ 奥さん！」

根古の強い調子の声が宏美にも聴こえてきた。君恵の身体から緊張感、或はりんとした抵抗の姿勢が見る見る

失われていった。今度こそと、根古が君恵の肩を力強く抱き、己れの身体にぴったりと密着させるのである。

宏美は怒りに眉間を歪めながらその姿をカメラに何枚も撮った。

二人はさらに歩いて行って茂みの奥へと消えた。慎重に宏美は後を追ひ、途中から道を外れて鬱蒼とした密茂のなかに身体を隠し、まるでジャガーのように音をたてず二人に近づいた。

二人は緩やかな勾配の斜面に並んで腰を下ろしていた。肩を抱いたままだ。恋人同士のように、と言いたところだが、とても程遠い。美貌の未亡人に横恋慕して関係を迫る金貸しの禿げ社長、そんなところだろう。禿げ社長はしきりに君恵のほうへ顔を向け、君恵はそれから背けるようにそっぽを向いている。二人の横顔が宏美には見えていたが、鼻の下を伸ばした緩み切った根古の表情と、こわばり濃い眉を吊り上げている君恵のそれとの対比は鮮やかで写真に撮れば決定的な証拠品になりそうだったが、この距離でシャッターを切れば間違いなく二人に感づかれるであろう。

だから、宏美の位置からは会話も切れ切れではあるが耳にすることができた。憎々しい根古は連想どおり邪悪な魂胆を腹に持っている助平社長そのものであった。

「……今日こそはその柔らかい唇をいただきたいものですな。奥さん……」

「お断わりしますっ。こうして二人きりで話が出来ればそれでいいとおっしゃったじゃありませんか」

「子供みたいなことを。二人ともいい歳をした大人なんだ。こうして密会を繰り返していれば行き着くところは分かり切っているでしょうが。ね？」

根古は抱いている肩を一段と引き寄せる。君恵は小声の悲鳴を発した。両肩がキュンとすばまり、肩先が頬につく感じ。首を精一杯のばして、根古の脂ぎった顔から少しでも遠ざかろうと懸命の努力をつづける。鶴のような細首に痛々しいくらいに筋が立った。

なぜ大声をあげてしまわないのか。宏美は飛び出そうかとどまろうか迷うとともに焦れつつも思った。

「——大声、出しますよ！」

ようやく君恵はそう言った。

「かまいませんよ。しかしそうになったらここにとどまるのは男としてのプライドが許しませんからね。一人でさっさと引き上げるつもりです。そうしたらどうなるか。あなたの大事なご亭主の長年の夢は寸前で頓挫するんです。岡部大先生がどんなに嘆き悲しむことか。奥さんだってそういうご亭主の姿を目にしたくはないでしょう？」

根古はグイと君恵を抱き寄せる。

この章の残りは有料本編でお読みください。
#####

襲撃

ほらほら！ と頭越しに怒鳴りつけられてシャツの衿を猫の子供のように掴まれると、物凄い力で引き上げられた。

「は、離してっ」

宏美は叫んだが根古の逞しい腕力にはなすすべがない。三人組のうちの二人が彼女の両腕をとって、大木へ背を押しつけるようにした。さらに一本に束ね編んでいた黒髪をグイと引かれ、ガクンと顔をさらされた。

彼女の年代では肩肘はらなくとも女は男と対等の存在であるのが自然な常識であって、事実、カメラの世界、とくに宏美のような世界を駆け回るような写真家の世界では男女の差など日頃、意識することはない。しかしこうして暴力を露骨にふるわれると、自分の腕の細さや非力さが思い知らされる。気が強い性格なだけに口惜しさも人一倍だ。

「なんだ、その顔は」

完全に本性を剥き出しにした根古は化粧っ気のない宏美の眉の吊り上がった表情を嗤った。

「こうして改めて見ると、どうしようもないドブスだな。ドブスのうえにおっかねえ顔をするから、二目と見られねえブス顔になってるぞ。アン？ 宏美ィ」

掴んだ頭髪をグリグリとしごきあげる。頭皮が剥がれるような痛みが走り、宏美は頬を歪めた。

「痛いわ。やめなさいっ。この助平オヤジ！」

カッとなった宏美は憤然としてそう吐き捨てた。途端である。根古の平手が宏美の頬を激しく打ったのは。鈍い音が小さく響いた。痛みよりも先に宏美は顔を殴られたその事実に驚き、動転し、眼をパチクリさせた。殴打された経験は生まれて初めてだったのだ。ショックに頭がボォーッとし、自分を取り戻すのに時間がかかった。頬が猛烈に熱かった。打たれた顔半分が倍くらいにふくれあがった感覚である。

宏美は根古の顔を見あげ、彼が自分の反対の頬を打とうと手を振りあげているのを見た。根古はサディステックな笑みを口元に浮かべていた。

首が反対側へ吹っ飛んでいくのを、宏美はスローモーションでも見るような感じで俯瞰していた。口の中が切れたらしくわずかな出血を唇に覚えた。感覚的には顔が真ん丸になった気分である。あごが外れてしまったのではないかと思い、何度も大口をあけて関節の調子を調べた。男たちはそれを見て笑った。口惜しいことに涙が頬を伝わってきた。

「少しは見られるような顔になったじゃないか、宏美」

根古はその日本語を通訳して、いっそう哄笑した。

「いいか。殴られた事実に腹を立てるなよ。なぜ殴られたか、よい子ならその原因についてよく反省するんだぞ。それが出来ない悪い子は体罰あるのみ——」

そう言うと、根古は再び勢いよく手を振りかざす。宏美は眼をギュッと閉じ、奥歯を噛みしめて首をすくめた。初めて、男に対する恐怖心を胸に抱いた。

しかし打撃は襲ってこず、代わりに腫れて火照った頬を指先でソロソロと撫でられた。

「わかるか。お前はちょっと口数が多くて出しゃばりのところがあるんだ」

パブリカのように赫い頬をなぞっていた指があごをつついてくる。そして喉笛へと下がっていく。

「そういう女は嫌われる。子供ならまあ笑ってすませるだろうが、大人の女はそうはいかない」

指先は胸もとに這いおりてきた。V字に開いている襟捌りを円を描くようにあやしてくる。しだいに胸もとが乱れ、肌の露出が多くなってきた。指がシャツの最初のボタンにかかった。

「お前もそろそろ大人の女になってもいい年頃だ。せっかくの機会だからこの旅行中に俺がたっぷり舐けてやるさ」

根古はボタンを外した。汗ばんだ白い肌が面積を広げた。ブラジャーの肩紐も垣間見えた。男たちの噛みタバコを噛む速度が早くなってくる。宏美は言葉は出なかったものの、吸血虫のように這い回る根古の指を無視し、唇を真一文字に結んで必死に彼を見返していた。

「いいか、宏美。レディってものはな。他人の情事のさなかに飛び出してきたり写真をバチバチ撮ったりするもんじゃねえんだぞ」

「何が情事よ。レイプじゃないの！」

思わず叫んでしまい、宏美は慌ててビンタの攻撃に備えた。だが、それはなく二番目のボタンを外されただけだった。白いブラジャーのVゾーンがあらわとなった。フリルも刺繍もないマナウスの市場で投げ売りされているような廉価品だ。なだらかな彼女の胸の起伏を包み込むというよりかぶさっている感じ。それでも男たちにとっては昂奮の種であるのに代わりはなく、鼻息が荒くなってくる。

「レディってものはなあ」と根古。「そういう山猿みたいな口は叩かないものなんだよ」

笑いながら三番目のボタンを外す。宏美は無言のまま彼を睨みつける。

「どうやらお前にはこんこんと説教してやっても無駄なようだな。困ったもんだ。しかし慈悲深いこの根古様は決して不良女子を見捨てはしない。あらゆる手段をこ

うじて更正させてやる」

とうとうシャツのボタンを全部、外されてしまった。
肌けた胸前の奥に可愛い臍が見えた。

「まず罪悪の元であるカメラを没収する。岡部や鈴木には一時的な故障とだけ言っておけ」

根古はそう命じつつ、宏美のシャツを肩から抜きおろした。それは二の腕を下がり、肘のところでクシャクシャに重なった。若々しい宏美の下着姿は薄汚れたジャングルのなかに異彩を放つように輝き光っていた。

「そうそう、お前は肩幅のある女だったんだよな。日本人では珍しい体形だな。君恵のように撫で肩なのが標準だろう」

三人組に訳すと彼らはケラケラと笑っている。

「それからブラジャーも没収だ。これからはノーブラでいるんだ」

「なぜよ？」

そう尋ねている自分の愚かしさに宏美は内心自嘲する。こんな連中に理屈などありゃしない。ただ宏美に屈辱を味わわせて口を封じようとしているだけなのだから。

「なぜって、お前のオッパイはあまりに貧相だからだよ」

根古は彼女の背中に手を回し、ホックをさぐった。

「お前が男勝りなのも、レディのたしなみを知らない

のも、すべてはふくらみきっていないこのオッパイのせいなんだな。つまり女らしくなるためにはこのオッパイを巨しく熟れさせるのが近道なのさ」

とうとうホックを探り出すと、それを筆りとった。ブラジャーがふっと緊張感を緩めた。

「そのためにはいつも刺激していなくちゃならない。ブラなんかないほうがいい。シャツの生地にもいつも乳首がこすれているのが望ましいのさ」

いきなりそれまでの淫靡だが優しい手つきから、荒々しい狂暴さが甦った。根古は力任せにブラジャーを剥ぎとった。彼女の可憐なバストが露呈した。

宏美は下唇を噛んで仕打ちに耐えた。男たちの視線が胸の頂点に集中しているのがはっきりとわかった。

「本当にねえ！」

根古は大げさに驚いてみせる。

「こんな黒い乳首。インディオにもなかなかいないだろうなあ。きったねえ女だぜ、お前は！」

だからどうしたのよ、と言いたいところだったが、昂奮状態にある男たちを変に刺激するのはまずいと判断した。

「最後に、今夜からお前の食事は半分に減らす。少し血の気が多すぎるからな。さすがにそれでおとなしくなるだろう。みんなには腹をこわしたからとうまく言い繕うんだぞ」

「……」

「わかったら返事をしろ。宏美ィ！」

「わかったわよ」

「なんだ、その不貞腐れた表情は。全然、わかっていないようだな。え？」

ヤレヤレという顔をして根古は天を仰いだ。そしてそのまま彼女の晒されている鳩尾に拳をぶちこんだ。

「ウウ……」

呻きながら崩れ落ちそうになる身体を脇で腕を掴んでいた二人が抱え起こす。ついでに頭髪をもって焦点の定まらない目をしている彼女の顔を持ちあげた。その顔へ火の出るような往復ビンタが飛んだ。大声で悲鳴を発しそうになる宏美の口は背後から残りの一人が汚れた手のひらを一杯に広げて押えつけた。空手の型を根古が取ったので、宏美は目を大きく見開いて恐怖した。藻掻いたが三人の男の力はびくともしなかった。空手チョップが無防備な脇腹を襲った。激痛と突き上げてくる嘔吐感に宏美は涙をボロボロ流した。首筋にも食らった。乳首を摘まれ、捻りあげられた。男に触られるのは初めてであったが、羞恥を抱いている余裕がないほどの苦痛である。

足払いをかけられて転がされると、臀部に蹴りを入れた。宏美は立ち上がれないほどコテンパンにやられた。

「フフフ。どうだ。宏美。飯なんか食う気も起こらなくなっただろう」

背中にそう言葉を叩きつけると、再び髪を掴んで海老反るように引き起こす。真っ赤に紅潮し、歪んだ美貌に頼ずりするようにして、根古は言うのである。

「いいか。俺に逆らうとこんな目に遭うばかりじゃないぞ。お前の代わりにあの君恵を力づくでレイプしてやってもいいんだぜ。それも皆の知っている前でだ。俺だけじゃなくこいつらにも下げ渡して輪姦してやるか。なんだって出来るんだ。忘れるな。宏美。忘れるんじゃないぞ。わかったか？」

「……わ、わかったわよ……」

「バカ、わかりましたと言うんだよ」

根古は宏美の鼻の頭を摘んだ。

鼻筋に小皺を刻みながら呻いていた宏美だが、苦痛に耐えかねて喉を振り絞る。

「……わかりました……」

ふん、クソ阿女がと、根古は拳骨で頭をゴツンとやって三人組を連れ、戻っていった。

宏美は肩を震わせてすすり泣いた。全身がミシミシと痛んだが、肉体的な痛みよりも、不当な暴力に屈服させられたのが悔しい。自分が女であり、女がこれほど無力なものだったのかと思い知らされてショックだった。肌けたシャツを両手で掻き抱き、あらわな胸をしまいこん

でようやく起き上がっても、惨めさだけが心を支配した。この屈辱感を訴えようにもここには警察もなければマスコミもない。女権団体もレイプ救援センターもない。あるのは弱肉強食の自然界の冷酷な掟があるばかり。それは女にとってあまりに非情な現実であった。原始の世界もこうして支配する男の善し悪しによって女の運命が定められていたのだろう。文明が、都市が、これほど恋しく思われたのは初めてである。

この章の残りは有料本編でお読みください。
#####

大虐殺、そして捕獲

その夜はそうして息を殺し、まんじりともせず過ごさねばならなかった。

カビ族のものと思われる通信の声はある時は遠くなって皆を安堵させ、かと思うといきなりすぐ傍で聴こえて極度の緊張を強いるのだった。

「まあ、神経戦だな」

荷物をまとめながら根古は言う。白々と夜が明けてくるにともなってカビ族の声は悪夢のように消えていた。

「奴らも銃の威力は知っているはずだ。出来るだけこっちを消耗させて、それから襲う腹積りだろう。その前になんとかあの愛想のいい部族のところまでたどりつけるかどうか勝負だ」

「どういうこと？」

君恵が表情をこわばらせて訊ねた。彼女の瞳は充血していた。一睡もしていないのに加えて岡部を思う心労が重なっているのだろう。

「どういことって？」

「まさか引き返すつもりじゃないでしょうね」

「まさかも何もその通りだ。それ以外に何がある？」

「夫は……岡部はどうなるんですっ。鈴木さんは？二人を見殺しにする気なの！」

なんだって？ と根古は荷物から手を離し改めて君恵の顔を覗き込んだ。そして君恵のその表情に一步も引かぬ決意を読み取ると、なんてことを言いだすんだこの女は、と、大げさに呆れたふうを身体であらわした。

「奥さん、あなたの気持ちはよくわかりますよ。だけれどね、これだけは言わせてください。二人は残念だったが、我々の命があっただけでもよしとしなくちゃ。それだってまだどうなるかわかりませんがね。冷静になることです。現実を直視してください」

根古は、議論はそれまでと荷造りを再開する。もちろん君恵は納得できない。

「夫が死んだ証拠はどこにもないんです。少しも搜索せずに帰るのは明らかに犯罪行為ですわ」

「生きている証拠だってないじゃないか」

根古の語尾が荒くなる。これ以上、時間を無駄にしたい様子がありあつた。

「たしかに物的証拠はないがね。状況証拠は揃っている。岡部さんと鈴木は西の方角へ出掛けた。そして帰ってこなかった。夜、同じ方角からカビ族の声が聴こえてき、一晩中、我々を威嚇しつづけた。誰だって推理の結論は一緒だ。二人はカビ族に捕まり、どうにかされたに決まっている」

「いや、わからない」

そう言ったのは宏美だった。

「昨夜はあなたの迫力に巻き込まれてしまったけど、冷静になって考えてみればあの声のカビ族であるかどうか、そして果たして好戦的な態度の表明だったのかも、誰もわからないじゃないの。ひょっとしたら、事故で怪我をした二人をある部族が救助して、我々に報せにきてくれたのかもしれないわ。あなただってカビ族と遭遇するのは初めてなんでしょう」

「そうだわ。その可能性だってあるわ」

君恵は宏美の肩を抱くようにして謝意をあらわした。

根古は大笑いだった。嘲笑と呼んでいい笑いだった。

「わが同胞の平和ボケはこっちでも有名だがここまで

進行しているとはな。どうにもこうにも手の施しようがないようだ」

根古はそこで笑いを途絶させ、凄味をきかせるように二人に迫った。

「いいか。あの声が友好親善を求める合図なんてことは金輪際ありえない話だ。なるほど俺はカビ族とはまだ一度も遭遇していないがね。他の少数部族とは数限りなく遭遇している。その中には白人や他所者に対して戦闘的な対応をするものも少なからずいたんだ。アマゾンの部族はいろいろと分かれてはいるが、文化や生活に大きな差異なんかない。だいたい似たような行動様式なんだよ。それに照らしあわせても昨日の声は俺たちへの敵意でいっぱいだった。いや、俺が聞いたなかではいちばん激しい憎しみに満ち溢れていた声だった。残念だが現実是最悪だ。奥さん、あんたの亭主は奴らに捕まり、去勢された後、火で炙り殺されたに違いないぜ」

根古の話しぶりには迫力があり説得力があった。宏美もその勢いに押されて黙り込んでしまったほどだ。だが君恵は諦めなかった。君恵の岡部に対する愛情は深く大きいのだ。彼女は彼の手をもぎ取るようにして自分のほうへむき直させる。

「あなたに一片の人間性でもあるんならどうか心を開いて頂戴。あなただってジャングルのガイドでしょう。誇りも自尊心もあるんでしょう。今は失ってしまったで

しょうけど、かつてはこのジャングルを愛していたはずよ。だからこそガイドになったんだわ。根古さん、恥ずかしくないの。海の男はそんな真似はしないわ。溺れている人間がいれば、遭難している人間を発見すれば、SOSの信号を聴けば、仕事も任務も放り出して救助に向かうはずだわ。それが仁義ってもんでしょ。人の道ってもんでしょ。ジャングルで起きた事故の被害者をガイドがそのまま見捨てていくようなことは出来ないはずだわ」

声を枯らした君恵の熱情的な訴えを根古は薄ら笑いを浮かべて聞いていた。

「へへへ、一片の人間性ときたか。誇り？ 自尊心？ そうねえ。そんな言葉は映画のなかの主人公の言葉だと思っていたがねえ。あいにくこの俺にはロシア語より縁のない世界の言葉のようだぜ」

駄目だ、と宏美は思った。この男にはどういう説得も通じない。金銭欲と性欲だけで成り立っている男なのだ。それだって命と引き替えにするものではないだろう。

いきなり君恵は走りだし、根古の横を過ぎると、背後で成り行きを見守っていた三人組のうちの一人に体当たりした。ふいをつかれた男はバランスを崩し、よろめいた。その隙に君恵は彼から銃を奪いとった。彼女は銃口を根古に向けて構えた。

「さあ、これでどう？　気が変わるはずよ。搜索にいかねければあなたはここで私に撃ち殺されるんだわ」

しかし動揺をきたしたのは五人の荷運びたちだけだった。根古も三人組もちっとも驚いた風がない。君恵に引き金を引く度胸などないと夕力をくくっている。それはしかしその通りであった。

「いいさ」と根古は言った。「薄汚い原住民に殺されるより、奥さんみたいな美女に殺されるほうがいい。一思いにやってくれ。さあ、さあ——」

胸を突きだしながらジリジリと君恵との差を縮めていく。君恵は後退しながら焦燥感を強める。

脅迫を断念し、君恵は銃口を下ろした。青ざめた顔は無念の表情でいっばいだった。彼女はこれでとうとう岡部の救出を諦めるのだろうか。いや、最後の賭けが彼女にはあったのである。

「下劣だわ。あなたたちは。人間のクズよ。下等な欲望しか持っていない最低の男よ。これ以外、何の興味もないのでしょう」

そう唾棄するように言うと君恵は上着のボタンを外しはじめた。迫っていた根古の足がピタリと止まった。

さっとサファリウエアを脱ぎ捨てると、あっという間にインナーのTシャツをたくしあげ頭から取り去った。居並ぶ男たちの呼吸がつまったのが宏美にはわかった。

ノーブラジャーの君恵の肉体が覆い尽くすように頭上

に茂った樹木の間からまるで網の目のように降り注ぐ太陽光線に映しだされた。美しい女性美に満ちた官能的な白裸だった。巨きな双乳が昂奮気味の呼吸に上下していた。どんな男の気もそそる形の良い、ボリュームたっぷりで、それでいて頂点の蕾は乙女のように淡いピンク色をしているのだ。

君恵は自らの手で片方の乳ぶさをわし掴んだ。ほっそりとした長い指を乳肉が跳ね返す弾力感が見て取れる。掴みきれない肉を絞りだすように強く握り締めた。

「これが望み？ あなたはそういう人よ。これにつられてきたんだわ。いいわよ。昨日のように、いや昨日以上に、もっともっと愛撫すればいいわ。それともここに吸いつきたい？」

君恵は乳頭を摘んでグイと引っ張りだした。ゴムのように限界まで伸長した。ピンク色だったそこがみるみる充血していく。

男たちはからかうような言葉も嘲笑の薄ら笑いも忘れ、口を半開きにしながら彼女のエロチックな乳房に見惚れている。

君恵は乳ぶさを手放した。繊細な白肌に指の痕がくっきりとついている。彼女は剥き出しのまま銃を抱え、リュックを背負う。そして銃弾のつまったベルトをなおやかな肩にかける。

「ついてきた人には――」

凜とした君恵の声が響いた。

「この胸を、この身体を自由にさせてあげるわ。ついてこなくたってかまわない。私は一人でも探しに行く」

クルリとこちらに背を向け、君恵は力強い足取りで西の方角に向かって歩きだした。慌てて宏美もまとめた荷物を背負い、ふと思い立って根古の荷の中からカメラをもぎとって君恵を追いかけた。

「ヤレヤレ、とんだジャジャ馬を抱え込んだもんだ」

苦笑しながら彼もまた荷を担ぐと二人の女につづく。三人組も従わないわけにいかない。残された五人組は互いに顔を見合わせた。逃げたいのは山々であったが、根古がいなければ道に迷ってしまうのは明らかである。それでは獣に襲われたりカビ族に捕まったりしないうちに野垂れ死にしてしまうだろう。彼らもまたゾロゾロとついていくよりないのだった。

これまでの行軍よりもはるかに辛く、恐怖感のともなうものとなった。今までは好奇心を誘い、観察の対象でもあった猿や鳥たちの突発的な鳴声はすべて恐怖心を煽るものとなったし、わずかな小枝の折れる音さえ、銃口が火を噴く要因ともなりかねなかった。

「君恵さん、服を着たほうがいいわ」

宏美は先に行く君恵を心配して言った。君恵のあらわな肌には甘い汗の匂いに誘われて蚊や蠅がまとわりつき、隙を見てはひつつこうとしているのだ。

「それは約束違反だろう」

横から根古が口を挟む。

「奥さんのヌードを拝めないんなら一緒についてきたかいもないってmondaze。お前らのおかげで、こんな死と隣り合わせのキリキリした緊張感を味わっているんだ。虫くらい我慢するのは当然じゃないか」

根古はニタニタと相好を崩している。緊張感を覚えているとはとても思えなかった。

「願わくばズボンもパンツも脱いでスッポンポンになったらどうですか。これだけの人間の命、危険に晒しているんですからね」

「あなたって人はどこまで卑しいのかしら。君恵さんの心情がわからないの」

宏美はカッとなって言った。

「うるさい。子供は黙ってる。それとも何か。奥さんの代わりにお前が裸を見せるのか。なるほど交替制も悪くないな。ま、もっとも宏美の身体は見せるほどのもんじゃないけどな」

カラカラと笑う根古。あれほど拒んでいた救出活動に駆りだされたというのにこの陽気さはなんだろう。やはりこの男は特別、肝っ玉が座っているのだろうか。

「いいのよ。宏美さん。約束は約束。私はこのままでいいわ。だって裸でいる女のほうが多いのよ。アマゾンの部族には」

しかし熱帯の強い日差しと厳しい自然に子供の頃から馴れ親しんでいる部族の女の肌と君恵の肌はあまりにも違っていた。甲羅が一枚、あるのとないのとの違いのようだ。君恵のそれは柔らかく清らかでありすぎる。またたくまに虫たちの餌食にされ、樹木の葉や枝に傷がつけられていきそうだった。

宏美は無言でブルゾンのジャケットを彼女にかけてやった。根古も止めない。彼にとってもせっかくのボーナスが台無しになってはたまらないと思ったのだろう。

「あっ——」

君恵が小声を発し、身を屈めた。どうしたどうしたと皆が集まる。

「……岡部のチョーカーだわ……」

沈痛な押し殺した君恵の声。彼女の手には金色の細鎖が握られていた。

「あいつらが金目の物を放っておくわけがない。きっと抵抗した際に落ちたんだ。馬鹿なことを。手足を切り落とされるのがオチだぜ」

根古は辺りを不気味そうに見回しながら言った。

「これで諦めもついたんじゃないのか。形見も手に入ってたんだ」

君恵は根古を厳しく睨みつける。

「主人が殺された証拠にはならないわ。死体だってないんだから。どこかに連れ去られたのよ」

「へ。奴らの集落にまで乗り込むつもりなのかよ。かまわんがね。そうなりゃオッパイだけじゃなくてやっぱりまだ見ぬアソコも露出してもらわなくちゃなあ」

根古はそれを通訳した。男たちは目を毒やモリのように細め、頷きあう。

ドサリと誰かが地面に突っ伏した。何事かわからず、一同はそちらを見た。五人組のうちの一人が——宏美にアマゾンの伝説や民話を教えてくれたオジサンであった——俯せに倒れている。背中に鋭い弓矢が突き刺さっていた。射手の腕は半端ではない。見事に心臓を射抜いている。即死だろう。君恵の性器の色形を想像しながら、突然、死の暗黒に吸い込まれたのだ。

一同はパニック状態に襲われた。

この章の残りは有料本編でお読みください。
#####

奴隷、村へ

鋭い矢尻の先がすべて宏美へ向かって突き出されている。

(突き殺される……)

夢のなかにいるような気分で宏美は思うのだ。たしかにこの探険に出発するにあたり、宏美もそれなりの覚悟はしたつもりだった。原住民に殺される可能性は低いとしても不測の事故や悪疾に命を落とす事態もありうるだろうと考えていた。危険を背負ってもなおアマゾンには彼女にとって魅力的な秘境であったわけだが、やはり甘かったと言わねばなるまい。しょせん安全なベッドの中での決意などなんの意味ももたないのだ。こうして死の寸前に追いやられると、宏美はここに来たことを後悔したし、小便をチビリそうなほど恐怖している。なんとか生き延びる方法はないものかと、まだ無駄な足掻きを考えていた。

男たちの一人がズンと槍を突き出してきた。宏美は目をギュッと瞑った。襲うであろう激痛に備えて身を硬くした。が、触れはしたものの、皮膚を破りはしなかった。それどころか傷さえひとつつけなかったのだ。矢尻は宏美の胸をつつき、そして臍をつついた。しかしいつその手つきが兇暴になりグサッとくるかと思うと生きた心地がしない。恐怖心に耐え切れなくなり、宏美はたどたどしいポルトガル語で「助けて」と言ってみた。鼻がつぶれているので、変な声である。

宏美が声を発したので彼らは反応はしたけれども通じている様子ではなかった。宏美はつづけてスペイン語で言ってみた。これも徒労に終わった。

「助けてェ……」

宏美はとうとう日本語で叫びはじめた。すぐに啜り泣きが混じってくる。

「……殺さないでよお……」

宏美が泣いているのを見て初めて男たちが笑みを浮かべた。一人の、この中では最も若そうな男が片膝をつき、宏美の頭部の下に手を差しこんでやや起こした。腰にぶら下げていたナイフ——どう見ても文明社会で作られた金属性である——を片手にもった。それを彼女の顔に近づけていく。

「ヒーツ……」

目を抉りだされるかと思い、宏美は芋虫のような身体を藻掻かせた。他の男たちがそれを制するように槍を突き出す。

若い男は器用に宏美の顔面の部分の網を切り取りはじめた。額の丸みからあごの丸みとデスマスクでも剥ぐようにして顔を露呈させた。

「うう……」

彼女の汚れた顔には網の目がうつっていたし、鼻の頭や瞼が赫かった。一人の男が若者に竹に似た筒を渡した。どうやら水筒のようだ。受け取った男は水筒の栓を開けて宏美の顔に傾けた。冷たい水が彼女の顔にかかる。男の指が顔面をこすってきた。顔を洗っているのだ。器量を品定めしているのだろうか。根古が再三口に

したカビ族の習慣が思い起される。彼らは捕虜にした男は去勢したのち殺害し、女はハーレムに囲って慰安婦にする——もしそれが本当なら、助かる可能性があると思ふべきなのだろう。ひと思いにここで殺されるほうが幸せだ、などとうそぶくのは死に直面した経験のない評論家の作文だ。

彼女の顔からほとんど汚れが落ちると、若い男は顔をもって、他の男たちに見せつけるように曝した。オウムのような色鮮やかなペインティングの中に埋まっていそうな細い幾つもの目がこちらを凝視する。不思議なもので言葉も生活もまるっきり違う人間たちなのにその目を見ていると考えていることはわかるのだ。値踏みするような、好奇心と好色の色がありありと滲んでいる。女を品物としか考えていない目つき。それは現代文明社会のなかでもいくらでも感じられる種類の目つきだが、より露骨でより直接的であるのだ。女性の人権とかフェミニズムとかいった建前の常識に阻害されていないからなのだろう。

彼らは宏美の洗われた白い顔をしげしげと覗きこんだ。白いといっても彼らが時折目にしているはずの白人の白さとはまた違う。それは彼らにも理解できるらしく好色の意識のなかに不思議さも混じっているようだ。

彼らは何事か彼らの言葉で話し合い、そして低く笑いあう。まるで痴漢の会話のようだ。若い男が宏美の上唇

をつまみ、めくりあげた。

「……」

恐ろしさのあまり宏美は声もでない。男たちは宏美の健康的なピンク色の歯茎を確認すると、さらに頷きあった。次に若い男は鼻筋の通った宏美の鼻のやや上向き加減である鼻の頭を人さし指でもちあげた。

「ああっ……」

さすがに悲鳴がこぼれる。寄せた眉を困惑したように迫り上げ、額に皺を刻んだ。彼らはツーンとひきつった鼻孔の奥へ視線を忍びこませているようだった。宏美に屈辱を与えようとしているのではなく、彼らにとってそれは一種のマニュアルのようである。

顔の探索が終ると、宏美は投網のなかから出されるようであった。一瞬、彼女の頭に逃走の衝動が芽生えた。身体が自由になった刹那、この若い男に金的蹴りでも食らわせて脱兎の如く突っ走る——成算はなかったがやってみる価値はあるように思えた。逃げるなら今しかない。

しかし彼らは狩猟のベテランであった。せっかく網に入れた獲物を逃がすようなヘマはしないのだ。宏美は俯せに転がされると、首根っ子をギュッとわし掴みされた。柔道の締め技にも似た急所の押さえこみである。頸動脈がグリグリと圧迫されて、気死寸前に追いやられる。こめかみに青筋が立ってくるのが自分でもわかつ

た。

そうしておいて網が少しずつ身体から取り去られていく。上半身が剥き出しになると彼らのうちの一人が素早くそのうえに馬乗りになり体重をかけてくる。逃げようにも逃げられない。

下半身からも絡み切った網が器用に外された。彼女の背に乗っていた男が退き、頸動脈を締めていた男も手を放した。宏美は一筋涎を垂らしながら、首まで病的に紅潮させていた顔を力なく振っている。

彼女の衣服を剥ぎ取るのは造作もない作業であった。宏美もほとんど抵抗らしい抵抗を見せない。身体を起こされると次々にシャツのボタンが弾け飛び、両肩を剥き出しにされる。下着を付けていない胸がさっとあらわになる。乳ぶさへの好奇心が顔ほどでないのが宏美には不思議であり、そして安堵するところでもある。そういえば現住の部族のほとんどの女は乳ぶさを露出している。女の羞恥心が低いのは男のこうした無関心さが関係しているのかもしれない。

宏美は両手を背中に持っていかれた。彼らが縛ったのは手首ではなく指であった。親指と小指を除いた残り三本の指がまとめて縛られたのだ。両手をあわせているから六本になるが、この姿勢を保つには肘をピーンと伸ばしたままにしていなければならない。拘束を振りほどこうとして下手に暴れると指の骨が折れてしまいそうであ

る。手錠がないのなら、こうして縛るのもなかなか理にかなった方法のひとつであるのかもしれない。

宏美の細首に縄で作った輪がかけられた。首縄の縄尻はあの若い男が持っている。彼は彼女の前に回ってそれをグイグイと引っ張った。宏美は引きずられるように立ち上がり、頭ひとつ小さな彼らに連行されることになった。上半身は素っ裸、このジャングルでこの姿では万一逃げだせたとしてもとうてい生還の望みはない。

宏美は何度も転んだ。悪路に後手縛りではバランスを崩してしまう。その都度、男たちは大声で嘲笑し、槍の柄のほうで宏美の身体を小突き回した。考えてみれば、捕虜後、すみやかに自分たちの村へ連行する気であれば、こんな縛り方はそもそもナンセンスであるから、これは徹底的に捕虜を愚弄し、屈辱を味わわせる意図を持っているのではないかと思われた。カビ族とはそういう種族なのだ。

かなりの距離を歩くと、もう宏美の白裸は泥だらけになってしまった。もともと浅黒の乳首は泥のなかにならずで、見えなくなってしまうくらいだ。

宏美の首縄の縄尻を持って引っ張っている男が先頭で、他の男は宏美の背後につづいている。彼らだけが知っている獣道を何キロも行進した。日が西の空に傾き、闇の世界が忍び寄りつつある頃、彼らは立ち止まり、腰を屈めた。クタクタに疲れ切っていた女捕虜はその場に

倒れこんだ。男たちは茂みからひとつの方向を眺めながら、ホウ、ホウ、と鳥の真似をはじめた。ややしばらくして茂みの向こうからほとんど同じトーンと調子で、ホウ、ホウ、と声が返ってきた。仲間への通信であるらしい。昨日、根古や君恵ら隊員全員で怯えながら聞いたあの声であった。宏美はそれがもう十年も前の出来事のように思えた。マナウスでの生活など百年も前に感じられる。

カビ族の兵士たちはしばらく通信を交わしあったのち、ようやく警戒心を解いて立ち上がった。茂みの向こうにはほぼ同じ人数と思われる一隊が野営の準備をしているようだった。合流すると互いの無事を喜びあうように彼らは笑顔で抱き合っていた。こちらのグループの一人が宏美を指さして声高に報告した。宏美は首縄を引かれて、前へ引き出された。ざわめきが起きた。「ほほう、捕まえてきたのか、よくやったよくやった」といった雰囲気……。

宏美はふと気がついて野営地のなかに君恵の姿を探した。ひょっとしたらあの後、ここに連れてこられているのではと思ったからだ。

この章の残りは有料本編でお読みください。
#####

金髪の女囚

三日目までは数えていたのだが、それ以降はどうでもよくなってしまった。

悪路をついたジャングルの行軍は苛烈をきわめた。最初の夜には励ましあい、ジョークのひとつも飛ばしていた二人だが、その頃になると口をきくのも億劫になり夕食が済むと折れ重なって死んだように睡眠を貪るのだった。

疲労は君恵よりも宏美に色濃かった。担いでいる荷が重かったせいもあり、さすがの若さも限界にきていたようだ。男たちは二人には無関心を装っていたが、時折見せる肉欲に満ちた淫靡な視線は宏美も君恵も知っていた。ただ彼らの指導者はストイックなほど、そういった行為を慎んでいるように思えた。もちろん、そうであってもなくても、疲労困憊している二人にはどうでもいいのであって、勝手にするがいいわ、といった捨て鉢な気分があるだけである。劣悪な食生活と苛酷な労働、それに不潔な環境が美女たちの容貌に影響を与えないはずがなかった。身体はおろか、顔もまったく洗っていないのだ。若い宏美の頬には吹出物やニキビを作ったし、君恵の目の下にはくっきりとした隈ができていた。露出して

いる乳ぶさの被害は豊満な分、君恵の方が大きかった。樹木の葉の分泌する緑色の液体が理想的な球形にこびりついていたり、小さな虫もアンダーバストに忍びこむようにへばりついていたり、いちいち取り除く気力もなかった。ただ、その中央の形の良い乳首があえかなピンク色を保持し、根古健太が狙った極上の逸品ぶりを物語っているだけである。

村に近づいたのは男たちの様子に昂揚感が生まれてきたことでわかった。身体のペインティングを美しく鮮明に描き直し、鳥の羽も取り替えた。意気揚揚と凱旋する誇らしさが彼らには見られた。

君恵も宏美も、いやがおうにも緊張せねばならなかった。さらに男たちが二人を小川へ連れていき、身体を洗うよう手振り身振りで示したときは、いよいよだと観念した。久しぶりの冷水清水は心地よく、生き返るようだったけれど。

「たぶん、明日だわ」

と二人は話し合った。どんなことになっても、どんな目に合わされようとも、助け合い励ましあい、きっと日本に帰りましようとの再び誓いあった。

しかし、疲労と緊張に頭がコチコチに堅くなってとうとうその日は一睡もできなかった。

次の朝、二人はもう荷物を背負わされなかった。いつぞやのように後手に三本の指を縛られる拘束を施され、

首縄で繋がれた。上半身は裸のまま。洗った彼女たちの肌は滑らかで光沢を取り戻していた。

用意が整うと先頭の男が、ドラムを取り出し、ゆったりとしたリズムで叩きはじめた。最後と思われる行進が始まった。

鬱蒼とした茂みが突然切れ、自分たちがずいぶん高いところを歩いていたのがわかる。眼下にかなりの面積の空き地があり、そこには円形の柵で囲まれた居住区が設けられていた。家とおぼしき粗末な建造物が、それでも幾つも立ち並んでいるので、村と呼んでもいいくらいであった。カビ族の主要都市のひとつなのだろう。

ドラムの音を聞きつけてまず子供がそして女たちが、最後にのそのそと男たちが柵の門を出てこちらに向かってきた。宏美も君恵も足がすくんでしまい、何度も肩を小突かれた。斜面を下りていく。兵士たちを迎える歓喜の声が騒々しく高まってきた。彼らもそれに呼応するように槍を何度も突き上げ、ホウホウと叫んでいる。とくに若い男は昂奮を隠し切れずに涙まで流しているのだ。

出迎えの者がどうやら帰還兵のなかに見慣れない二人の人間が混じっているのに気づいたようである。そしてそれが背格好から女であり、拘束されているのを知ると、歓喜の声をさらに高めた。彼らにとって奴隷は国家的な財産であるらしかった。

一行はいよいよ斜面をおりたち、村のカビと相対し

た。ドラムが鳴りやみ、上官が前に進みでた。出迎えの者も騒ぎを静めた。これから帰還の儀式が行なわれるのだろう。群衆のなかから付き添いの男二人を両側に従えながら、ひときわ身体の大きな——小柄な彼らのなかではズバ抜けている。宏美よりも大きい。身長だけでなく体重もたっぷりとあった——そして頭にバンダナのような羽飾りのいっぱい付いている帽子をかぶった男が出てきた。年齢は五十くらいだろうか。

「ボスだわ」君恵が小声で囁いた。「あれは王冠よ」上官はその男の前に立ち、恭しい声で歌うように朗々と喋りはじめる。たぶん遠征の報告をしているのだろう。ボスは腕を組んだまま黙って聞き入っている。仰々しい儀式には適当に付き合っているのが民衆の常。ボスの後に並んでいる人々の関心は最初から君恵と宏美に向いていた。子供たちは指を差し純粋な好奇心を示し、男たちは露骨な好色をあらわにした。女たちは剣呑な敵意を視線にこめている。

宏美がひとまずほっとしたのは女たちの鼻に何の装飾品もぶらさがっていなかった点だ。それどころかペイントをしている者もいなかった。腰に布を巻きつけている以外はほとんど着飾ってはいない。男たちも同様である。ボスと兵隊だけが色々と衣装を凝らしているのである。

上官の報告がクライマックスをむかえ、声が大きくな

った。それが山を越えると、ボスは彼を抱き締めた。群衆たちが一斉にときの声をあげた。儀式は終了したようだ。兵士たちは熱狂する群衆に迎え入れられた。手を握り合い、肩を抱き合い、涙を流しあって無事を喜んでいる。

捕虜として連行されているのでなかったら、宏美も傍らで感動し、シャッターを切りまくっていただろう。これは素晴らしい写真になったに違いない。しかし現実には囚われの身、しかもジュネーブ協定など遠く及ばないアマゾンの奥地の捕虜である。

捕虜の身柄は英雄の兵士たちから、まことに貧相な男の手に移った。髪の毛がぼうぼうとのび、その真ん中が河童のお皿のように綺麗に剃りあげられている。背も奇形に近いほど小さく、刑務所の管理官というよりは、奴隷の監督官といったほうが良さそうだった。

彼は二人を繋いでいる首縄を引いて、まずボスのもとへ連行した。群衆は自分たちとは違う、かといって白人とも似ていない珍妙な戦利品に少しでも近づこうと押しあいへしあいして迫ってくるが、男は厳しい声を上げ、道を掻き分けるように歩いていく。二人は肌をまさぐられ、髪を引っ張られしながらなんとか自分を保とうと必死に勇気を奮い起こした。

ボスはさすがに露骨な感心を二人には示さなかったが、それが本心とも思えない。前に立った二人をそれぞれ

れ顔をあげさせて覗き見る目つきはどこの男のものとも違いはしなかった。宏美のあごに手をかけ、君恵よりもいくらか長い時間、吟味していた。ボスは小男に鷹揚たる貫禄をもって何事か言い、くるりと踵を返すと兵士たちをねぎらいながら柵のなかへ戻っていった。

つづいて二人も連行されていくが、ボスの目がなくなると子供たちの悪戯が開始された。彼らの投げつけてくる石つぶてはじつにコントロールが良く、捕虜の剥き出しの肩や背中に命中した。中には小石を吹き矢の筒に詰めて狙ってくる子供もいる。大人たちはそれを諫めないばかりか、けしかけてさえいる。

「こうやって狩りの訓練をさせているんだわ」

君恵が自嘲気味に言った。

「子供の訓練の相手ならまだいいけど……」

宏美は頭をかすめてくるつぶてを避けながら、

「大人の訓練の相手なら命はないわ」

二人の会話を聞きつけた男が宏美に向かって怒鳴り声をあげた。そしてもっていた木の棒で腰の辺りを叩きつける。子供たちが大喜びで囃子たてた。ここでも私語は嫌われるようだ。

柵のなかは思いの外、合理的な街づくりがなされているようだった。大通りがあり、その両側に整然と力やをふいたような家が並んでいる。家には一家族七八人が住んでいるようだった。大通りのつきあたりには一回り大

きな家があり、それがたぶんあのボスの居住する家屋なのだろう。

二人の引き回しは大通りを進んで、ボスの『宮殿』の前で迂回した。柵に面した、つまりこの村では最も日当りの悪い辺境地区に捕虜の住みかがあった。それはそこそこの広さをもつ檻であった。木が格子状に組まれ、蔓で結ばれている。文明社会の刑務所は市民の目から秘匿されているが、ここでは誰でも好きなときに来て、じっくり自分たちの勢力の強大さの象徴である捕虜の姿を観察できるのだ。

驚いたことに檻には十数名の女たちが入れられていた。先客がいたのだ。扉が開けられ、緊縛を解かれた君恵と宏美が突き飛ばされるように中に入れられると、女たちは怯えたように檻の隅にかたまってこちらを凝視している。彼女たちは全員インディオであるようだった。

扉が閉められ、門が下ろされると、例の小男は何事か荒々しく女囚たちを罵り、棍棒で檻の丸太の格子を打ちつけた。

君恵と宏美は先輩たちからやや離れた場所に腰を下ろし、彼女たちを観察した。向こうも新しく入ってきた色の白い不思議な女二人をじろじろと見ている。彼女たちの年齢は様々のようだ。君恵と同じくらいの年増もいれば、どう見てもローティーンにしか見えない子供もいる。むろん上半身裸だが彼女たちは元来そういう習慣で

あってとくに衣服を剥ぎ取られたわけではないのだ。気がつくのはどこかカビ族とは雰囲気が違うところである。今まで目にしたカビ族の女たちは小柄ではあるものの血色がよく、じゅうぶんに肉や脂肪をつけていたし、活気に漲っていたように感じる。それに比べ、この女たちは痩せ細り、栄養失調なのは明らかであった。瞳の色には怯えしかなく精気がない。

カビに征服された他の部族の女たちではないか、それが君恵の見解であった。

「奴隷はこれだけしかいないのかしら。ずいぶん少ないように思えるけど」

宏美の問いに君恵は首を振った。

「違うと思うわ。これは戦いの一シーズンの成果なのよ。彼らの軍隊は私たちを捕まえた兵士たちだけではない。何班にも分かれて東西南北へ派遣されているのでしょう。彼女らは別の部隊の戦利品なのよ。奴隷はもっと他にいるはずだわ。この檻はきっと未調教の奴隷を入れておくための専用の檻なんでしょう」

「ハハハ……」

宏美は自嘲気味に笑った。

「牧場で見たことがあるわ。子馬だけを入れておくケージを。あれと同じね」

その子馬のケージはかなりの人だかりを集めていた。檻をぐるりと囲んで、興味深げに覗いている。動物園と

同じように人気はやはり新しく到着した『珍獣』で、視線は一手に日本女性が引き受けていた。あの小男が観客たちにもう少し下がるようにと手を振っているところなどパンダの畜舎さながらであるし、中にはふとどき者がいて、長い木の棒を檻に差しこみ、『珍獣』にちょっかいを出そうとさえするのである。

「どこにでもマナーの悪い奴はいるわよ」

宏美は小声で囁きクスクスと笑った。それが観客たちのざわめきを誘ったようである。泣き喚く女捕虜はいても不敵にも笑みを浮かべる者などいなかったのかもしれない。まさに『珍獣』を見た目つきである。ある者が何かを檻のなか——宏美の膝元を狙って——投げこんできた。よく見るとバナナの切れ端のようであった。

「あらあら、餌だわ。動物に餌をやらないでくださいっていう立て札はないのかしら」

「とんでもない」と君恵。「バナナはここでは貴重品。彼らだって毎日食べることは少ないでしょう。あなたは人気者になったのよ。餌ではなく『お捻り』と言ったほうが正確よ」

「なるほど。じゃ今投げこんだ男はたいしたブルジョワなのね」

宏美はそのバナナを拾い、同僚である女捕虜のなかの最年少と思われる少女に差し出した。彼女は宏美の好意をなかなか理解できないで、宏美の顔と青いバナナを交

互に見比べていたが、ついにご馳走の誘惑に勝てなくなったのか、ひったくるように奪いとるとムシャムシャと食べはじめた。

観客たちが大騒ぎしだした。どうやらそれはブーイングであるらしい。

「……せっかくのお捻りを他人に横流ししたものだから怒っているんじゃない。奴隷が支配者のプライドを傷つけるようなことをしちゃいけないわね」

君恵は宏美の脇腹をつつきながら冷やかした。怒ったのは管理人の小男である。観客にはおとなしくするよう必死に宥めるポーズをしていたが、こちらを振り向くと長い棍棒を差し入れてきて、まず宏美の鳩尾を突き——その操作はじつに手慣れたものであった——次にバナナを受け取った少女の腕を叩いた。累が少女にまで及んだことに宏美はカッときて、立ち上がるやいなや男の棍棒を掴みグイと中へ引っ張りこんだ。思いがけない捕虜の反乱に男は驚いたらしく、そのまま檻に引きずられて顔をいやというほど打ちつけた。鼻がつぶれ、鼻血が噴き出した。

「やりすぎよ、宏美さん」

心配げに君恵も立ち上がる。

なぜかこの立ち回りは観客に大受けであった。手を叩く者、腹を抱えて転げ回る者、大声で囃子たてる者、感情表現がストレートで素朴である。

小男は真っ赤になって激怒した。眦が吊り上がり、赤い眼で宏美を睨みつけている。彼は扉の門に手をやり、今にも開けて入ってきそうである。どんな懲罰を受けるのか、さすがの宏美も美貌をこわばらせ後退りする。少女が大声で泣きはじめた。それにつられて二三人の大人の女も喚くように涕泣する。檻の前は騒然としたムードに包まれた。

ドラムが柵の外から聴こえてきた。単調な、どこか憂いを帯びたリズムである。集まっていた群衆たちがさっと檻に背を向け、一斉に大通りの方に走っていく。扉に取りついていていた小男もヤレヤレといった表情で未練がましく宏美に一瞥をくれるや、群衆の後を追っていった。

「また遠征隊が帰還したのかしら」

「どうかしら。さっきとはドラムのリズムが違うようだけど」

二人は大通りが見える位置の丸太にしがみついて様子をうかがう。

「どうでもいいけど、間一髪、助かった」

「無茶しないでよ。宏美さん」

君恵はそう言ったけれども、彼女の無邪気なお転婆のおかげで自分の置かれている絶望的な状況がふと脳裏から消えていたりする。それだけでもずいぶん気分的に楽なのはたしかだ。

二人の横に他の女捕虜たちも集まってきて大通りを注

視する。丸太を猿のように登り、上から見ている者もいる。彼女たちはその大通りを何がくるか、知っているようだった。一様に、不安な哀しい目つきになっているのが気にかかる。

ドラムの音が近づいてきた。柵のなかに入ったのだろう。人々のざわめきも一緒に近づいてくる。

ここからは大通りの両側に並んだ家屋に邪魔されて、その間隔の隙間から切れぎれに様子を見るしかなかった。その何かが、例のボスの宮殿の前まできてくれば、そこはかなり広い丁字路であるのではっきりと正体が掴めるであろう。

上に登って見ていた者が檻から腕を突きだして指を差し、何事か叫んだ。そちらを向くと、家屋の間に行列が進んでいるのが見えた。先頭には槍をもったカビ族の女が胸を張って歩いている。次もインディオの女であるが、様子がまるっきり違う。彼女は背にずっしりと重そうな麻袋のようなものを担いでいた。ちょうど君恵と宏美が連行されてくる間に兵士たちの荷物を背負わされていたのと同じ状況だ。それがどんなに重量のあるものであるかは、屈するように前傾した彼女の上半身——当然ながら衣類はまったく身につけていない——と、よろける足元からして歴然としている。

問題はそれではない。先頭の女は手に縄を掴んでいた。その縄は君恵たちのときのように首に繋がれている

ものではないのだった。ここからでは角度と距離があって判然としないのだが、どうやら縄は後の女の顔の中央へと伸びているように見えるのである。

「……」

宏美は固唾を呑んで君恵と顔を見合わせた。

鼻輪……。

その女奴隷が鼻輪をほどこされ、牛のように曳かれているのは残念ながらたしかなようである。次の牽引者と奴隷が見えると、檻のなかの女たちが大声で喚きだした。髪を掻き耄り、地面をドンドンと叩き、丸太の格子を力のかぎり揺らしている。

「タヒア！ タヒア！」と彼女たちはしきりに口に出している。

以下は有料本編でお読みください。

#####